

921.4-Ma92ㄅ



1200500759560

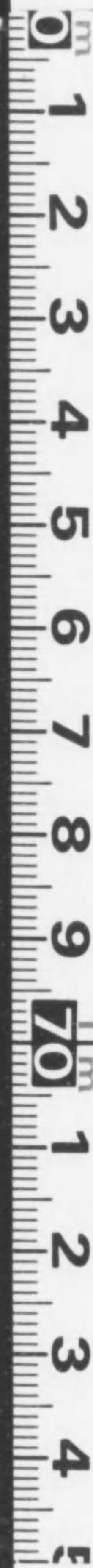
1.4
92

字文詳解

學教授 松崎覺本著

完

日比谷出版社兌



始



書文序
雲龍遊飛天群鴻戲海人間茂
漢大夫內司馬李遷
難過王羲之書字勢雄如龍躍
劉門虎卧司閣
歷代寶之傳以爲訓藏諸秘府
永萬年失據
又後世兩所載其絕滅
物遂令右將軍王羲之
未宋元室帝恐其絕滅
受命令復外散騎詩此周
寓其文用爲教授但文勢不
生焉不後既
推其理爲之次韻夫學若蓋
是生焉不後既
之始也思以開玄朴墳典之
諸未弘正代稍文
持以之書乃著故五經義
指三木包說百家
其文論天地下
皇封禪之勳於
乃令
習約上度建首明王
論秦始列碑之法
勳者難義若
星辰之度建首明王
論秦始列碑之法
勳者難義若
台漢之書次第
傳通世俗以爲法
勳者難義若
義之次韻正之焉得
千字文惟義與論
者難義若
爾無以得悟寂
或末周轉率已
情萬無
記意以曉愚蒙
若有知者
益無更爲潤色焉
所見以曉愚蒙

Q21.4
MA92

駒澤大學教授 松崎覺本著

千字文詳解

完

日比谷出版社 兌



千字文詳解

目次

一、緒言	一……四頁
一、千字文本文	一……八頁
一、千字文詳解	一……一七頁
一、自跋	一……一八頁
一、附說	一……一八頁
一、追記	一……二〇頁

(畢)

緒言

字文は、三國時代魏の鍾繇と云ふ者が原作したと云ふ。然るに其の後紛亂して次序錯雜なりし者を、六朝時代梁の周興嗣と云ふ者が、武帝の勅に因つて之を整理し、韻字などを次第順序して出来たと云ふのである。故に此の千字文の開卷第一に、「梁員外散騎侍郎周興嗣次韻」とあれども、其の次韻とは、普通に言ふ所の、他人の詩韻を次ぐと云ふ如き意味ではない。只だ韻礎を整理し次第順序して、此の千字文に作り上げたと云ふ意味の者である。故に最初我が國に献上せられたる鍾繇の千字文は、今日存在せざれども、此の周興嗣が整理し纏め上げた千字文を見れば、鍾繇原作の者と大差なき者たる事が首肯せらるる。其處で少し許り兩氏の歴史を辿つて見れば、

鍾繇（三國）字は天常。皓の曾孫。魏時代の人なり。書を學ぶこと五十年。初めは曹喜を師として、學ぶこと十六年。又劉德升に従ひ、抱犢山に入り學ぶこと三年。又

蔡邕が筆法に思ひを精しくして、學ぶこと三十年。八十歳に至つて、始めて神に入ると云ふ。胡昭と並び稱せられ、「書法の大宗」と云ふ。書を善くし謀を好むを以て武亭侯に封ぜらる。繇の書は、「飛鴻海に戯れ、舞鶴天に遊ぶが如し」と評せらる。王愔曰く、「晉の世以來、書に工みなる者、多く行書を以て名を著はす。鍾天常も亦行書を善くす」と。

然るに王仁が百濟古爾王の命を奉じて來朝し、論語及び千字文等を献じたのは、我が朝應神天皇の即位十六年二月であつた。其れより魏の嘉平三年、「司馬懿卒」とある歳を逆に遡り數ふれば、三十五年と爲る。今日より數ふれば一千六百七十二年前と爲る。

次に周興嗣の略傳を掲ぐれば、

周興嗣（南北朝）、字は思慕。世世姑熟に居る。善く文を屬す。梁の天監の初め、休平賦を奏す。散騎侍郎に累遷す。時に法書中に王羲之の草書千字あり。其の倫せざる

を思ひ、興嗣に命じ、韻語を以て之を屬せしむ。興嗣一夕にして文を成す。鬢髮爲に盡く白し。給事中に遷り、國史を撰す。文集百餘卷あり。

とある。此の草書千字と云ふのが、鍾繇原作千字文の字なれども、「倫せず」と云つて、次第順序なく、只だ雜然たる離れ、ばなれしたる文字なるべし。故に一夕にして文を成したと云ふのが、前述次韻の意味であらう。

又「佩文韻府」の中に、千字と云ふについて、「廣川書跋」、初め右軍の遺書を得たり。

梁の武帝、嘗て殷鐵をして一千字を石搗せしめ、字毎に一紙。雜碎序なし。因つて周興嗣に命じて、次いで韻語と爲さしむ。其の成る時、一夕にしく鬢髮盡く白しと。然れば之が今日傳ふる所の、周興嗣次韻の千字文と云ふ事に爲る。

抑も梁の天監と云へば、武帝即位元年の年號で、論説や千字文など献上の歳よりは、二百十八年の後である。

之を要するに周興嗣次韻とあれども、此の千字文の外、別に鍾繇作の千字文があると

云ふわけではない。故に次韻の次は、叙す即ちついでと云ふ意味に解すべき者たる事が知らるる。尙は之を千字ぶんと讀まずして、千字もんと讀む所以は如何と云ふに、昔王朝時代に吳音が傳來せし故、文をもんと讀むのである。文章博士を「もんじやう博士」と讀むに同じ。漢音ではぶん、吳音ではもん。吳音が先きに傳來して、漢音は餘程後に傳來したのである。故に佛敎學者や國學者は、殆ど吳音を主とす。之れに反して儒敎の漢學者は、漢音を以て主と爲し、従つて訓點などに、國語法を誤れる者頗る多し。四書の後藤點の如きは、其の代表である。千字もんと云ふについて、聊か附言し、之を以て緒言と爲す。

◎千字文

梁員外散騎侍郎

周・興嗣次韻

龍	菜	劍	露	閏	辰	天	鳥	海	珠	金	律	寒	宇	始	鱗	果	玉	雲	秋	日
師	重	號	結	餘	宿	地	官	鹹	稱	生	呂	來	宙	制	潜	珍	出	騰	收	月
火	芥	巨	爲	成	列	玄	人	河	夜	麗	調	暑	洪	文	羽	李	崑	致	冬	盈
帝	薑	闕	霜	歲	張	黃	皇	淡	光	水	陽	往	荒	字	翔	柰	岡	雨	藏	昃

千字文

一

乃服衣裳
弔民伐罪
垂拱平章
遐邇一體
白駒食場
蓋此身髮
豈敢毀傷
知過必改
靡恃己長
墨悲絲染
克念作聖

推位讓國
周發殷湯
愛育黎首
率賓歸王
化被草木
四大五常
女慕貞絜
得能莫忘
信使可覆
詩讚羔羊
德建名立

有虞陶唐
坐朝問道
臣伏戎羌
鳴鳳在樹
賴及萬方
恭惟鞠養
男效才良
罔談彼短
器欲難量
景行維賢
形端表正

空谷傳聲
福緣善慶
資父事君
忠則盡命
似蘭斯馨
淵澄取映
篤初誠美
藉甚無竟
存以甘棠
禮別尊卑
外受傳訓

虛堂習聽
尺璧非寶
日嚴與敬
臨深履薄
如松之盛
容止若思
慎終宜令
學優登仕
去而益詠
上和-down
入奉母儀

禍因惡積
寸陰是競
孝當竭力
夙興溫清
川流不息
言辭安定
榮業所基
攝職從政
樂殊貴賤
夫唱婦隨
諸姑伯叔

猶子比兒
交友投分
造次不離
性靜情逸
逐物意移
都邑華夏
浮渭據涇
圖寫禽獸
甲帳對楹
升階納陛
左達承明

孔懷兄弟
切磨箴規
節義廉退
心動神疲
堅持雅操
東西二京
宮殿盤鬱
畫綵仙靈
肆筵設席
弁轉疑星
既集墳典

同氣連枝
仁慈隱惻
顛沛匪虧
守眞志滿
好爵自縻
背邸面洛
樓觀飛驚
丙舍傍啓
鼓瑟吹笙
右通廣內
亦聚群英

杜稟鍾隸
路俠槐卿
高冠陪輦
車駕肥輕
礪溪伊尹
微旦孰營
綺廻漢惠
多士寔寧
假途滅虢
韓弊煩刑
宣威沙漠

漆書壁經
戶封八縣
驅轂振纓
策功茂實
佐時阿衡
桓公匡合
說感武丁
晉楚更霸
踐土會盟
起翦頗牧
馳譽丹青

府羅將相
家給千兵
世祿侈富
勒碑刻銘
奄宅曲阜
濟弱扶傾
俊乂密勿
趙魏困橫
何遵納法
用軍最精
九州禹蹟

百郡秦并 雁門紫塞 鉅野洞庭 治本於農 我藝黍稷 孟軻敦素 勞謙敦素 貽厥嘉猷 寵增抗極 兩疏見機 沈默寂寥

嶽宗恒岱 雞田赤城 曠遠縣邈 務茲稼穡 稅熟貢新 史魚秉直 聆音察理 勉其祗植 殆辱近恥 解組誰逼 求古尋論

禪主云亭 昆池碣石 巖岫杳冥 假載南畝 勸賞黜陟 庶幾中庸 鑑貌辨色 省躬譏諷 林阜幸即 索居間處 散慮逍遙

欣奏累遣 園莽抽條 陳根委翳 凌摩絳霄 易輻攸畏 適口充腸 親戚故舊 侍巾帷房 晝眠夕寐 接杯舉觴 嫡後嗣續

感謝歡招 枇杷晚翠 落葉飄颻 耽讀翫市 屬耳垣牆 飽飫烹宰 老少異糧 紈扇圓潔 籃筍象牀 矯手頓足 祭祀蒸嘗

渠荷的歷 梧桐早凋 游鶻獨運 寓目囊箱 具膳餐飯 饑厭糟糠 妾御績紡 銀燭煒煌 絃歌酒讌 悅豫且康 稽顙再拜

悚懼恐惶 骸垢想浴 駭躍超驤 布射遼丸 鈞巧任鈞 毛施淑姿 曦暉朗曜 指薪修祜 俯仰廊廟 孤陋寡聞 焉哉乎也

賤牒簡要 執熱願涼 誅斬賊盜 稭琴阮嘯 釋紛利俗 工翠妍笑 璇璣懸幹 永綏吉劭 束帶矜莊 愚蒙等誥

顧答審詳 驢騾犢特 捕獲叛亡 恬筆倫紙 竝皆佳妙 年矢每催 晦魄環照 矩步引領 徘徊瞻眺 謂語助者

梁員外散騎侍郎

周興嗣次韻

千字文詳解

天胤 松崎 覺本述

天地玄黃。宇宙洪荒。

天地玄黃。宇宙洪荒と棒讀みにするのを音讀と稱す。昔は御經を讀む如く、能く音讀した者である。次に重圈の徴しは、只だ平韻であるとの符號である。以下皆然り。天地は玄く黃にして。宇宙は洪に荒し。

之を訓讀と稱する。訓とは讀みと云ふ事である。音訓並用は、全く日本文學の特長である。故に漢文字は、支那大陸からの傳來であるけれども、支那には音讀があつて、訓讀がない。次に韻と云ふと、此の黃と荒とが共に平聲七陽の韻字である。従つて下

「詩讚羔羊」に至るまでの五十句、皆此の陽韻である。以下解釋せば、天は九天、地は九地などと稱する。是れ九は數取りの滿數であるから、天の如く高く限りなく重なつてゐるのも、又地の如く深く限りなく重なつてゐるのも、共に九の字を用ひて、九天、九地と稱する。従つて奥深き皇居をば、昔より九重と稱し、牡丹や、菊や、八重櫻など、花瓣の幾枚も重なれるを以て、之を九重の叙詞などに使用して、

古の奈良の都の八重櫻

けふ九重にほひぬるかな。

などと古人は吟詠してゐる。斯く八重、九重に重なれる天ゆゑ、極めて奥深き眺めである。故に玄しと形容したのである。「老子」開卷第一に「玄之又玄。衆妙之門。」とある。玄の意はこれと同じ。玄とは冥なりとて、暗くして先きが見えない貌。天上は限りなく高くして、幾ら仰ぎ瞻ても、青冥くして見極めがつかない。故に玄しと曰

ふ。老子では、此の玄き中から萬物が出生するから、「衆妙の門」と曰ふのである。天地も亦然り。

次に地は黄なりとは、事實土の色は黄色が多いから、然か言ふ。併し土には赤土もあれば黒土もある。然るに黄と曰ふ所以は、五色を、五行や方角に配當して、東と春と木とは青色。南と夏と火とは赤色。西と秋と金とは白色。北と冬と水とは黒色。併し此の黒と云ふのは青黒ひ意味。而して中央の土は黄色と、斯く配當するからである。故に黒土も赤土も、總て之を黄と曰つて、地に屬するのである。斯くて「上天下地」を以て、萬物を出生する所の父母、即ち根本起源とするのである。是れ亦此の四字を以て、一卷の首に冠せしめたる所以である。

次に宇宙とは、やはり天地の換名であるけれども、少し意味を異にする。「淮南子」齊俗訓に、

往古來今、謂之宙。四方上下、謂之宇。

とある。然れば哲學的に稱する所の、無限の空間が宇にして、無限の時間が宙である。上は天、下は地。其の天地の間に、縦に三世を貫き、横に十方を兼ねるを、宇宙と稱すべきである。三世とは、過去、現在、未來。十方とは、四方、四維に上下を加ふ。四維とは、四方の角を謂ふ。斯くて時間にも空間にも、無限に宏く且つ永久であるから、洪荒と形容したのである。洪は大なり。荒も亦果てしなく宏く大なる意味の文字である。荒れて十方に廣がる意味。故に人類、蟲魚、山川、草木、所謂動物、植物、乃至礦物等、ありとあらゆる萬物は、皆此の天地間、即ち限りなき宇宙間に現出し存在してゐる者であるから、最初に此「二大無限の四字」を以て冠したのである。

日月盈昃。辰宿列張。

日月は盈昃し。辰宿は列張す。

盈は滿つるとして、月の新月より満月に至るを意味し、昃は仄又は側に通じて、傾くと

訓する。即ち日が東天に昇り始めて、終に又西天に傾き没するを謂ふ。次に辰宿とは星の宿り場と解す。中について辰は、又日月星の稱、宿は星の座とし、日や月や各星の定住せる位置を謂ふ。故に列張と、羅なり張り廣がつて、宇宙間に遍滿してゐると云ふのである。

寒來暑往。秋收冬藏。

寒來たり暑往き。秋收め冬藏むる。

前述の如く天地位して、日月星辰も各自活動して、此に春夏秋冬の四時を現出する。即ち冬の寒氣が來たれば、夏の暑氣は往いて去り、秋に成れば夏に廣がつた熱氣も收縮して涼しくなる。又冬と成らば、更に地中に藏没して、熱氣は全く消滅して寒氣と變化する。斯く解する時は、冬藏まると讀む。又之を穀物の上から言ふならば、春殖樹した者が、夏に繁茂して、秋には結實し、而して冬には之を採取して、倉廩内に收

め藏むる。斯くて毎年送る中に、月日が餘つて来る。やはり互文のようである。即ち寒來の句で曆を言ひ、秋收の句で穀物の始末を叙する者の如し。

閏餘成歲。律呂調陽。

閏餘歲を成し。律呂陽を調ふ。

書經の堯典に、

昔三百有六旬有六日。以閏月定四時成歲。

とある。太陰曆は、大の月が三十日、小の月が二十九日。然かすると、大の月が七個月に、小の月が五個月。故に合して三百五十五日と爲る。然る時は、一年にて早や十日許り日が餘つて来る。故に三年経てば三十日許りの餘りと爲る。因つて三年目に一回とか、七年目に二回とかの閏月を設けて、時候と曆とを調和するのである。(筆者小學校時代には、一年は三百六十五日五時四十九分と聞いてゐたが、今は如何) 恰も少

し宛後れる時計の如き者である。併し一時に一箇月も後らかす爲に、今日は太陽曆を用ひて、遅刻の差を尠なからしめ、僅に二月を以て大の月と小の月とに爲して、氣節と曆日との調節を計つてゐるのである。やはり其の方が正確との由。律呂とは、六律六呂とて、陽の音樂に六律あり。陰の音樂に六呂あり。



陰陽十二種の樂器に依つて、大の月と小の月との陰陽消長を知つて、之を調節すると云ふ。併し今日では絶えて無い事ゆゑ、研究するには及ぶまい。

雲騰致雨。露結爲霜。

雲騰くものはつて雨あめを致いたし。露つゆ結むすんで霜しもと爲なる。

太陽に照されて水分が蒸發し、其れが騰り上つて、空間の冷氣に觸れて雨と成つて降り來たる。春から夏にかけては、此の氣節を現じ、又秋と成れば、蒸發氣が雨粒と爲つて、草や木に留まつて露と成る。又其れが寒氣の爲に結晶して、物もの凄すこき霜と爲る。

詩經の蒹葭篇に、

蒹葭蒼蒼。白露爲霜。

とある。

蒹葭あやはヒメヨシ。蒼蒼そうそうは青黄き色。言ふは、蒹葭の未だ枯れざる中に、早や露が霜と爲るとの意。

金生麗水。玉出崑岡。

金きんは麗れい水すいより生しやうじ。玉ぎよくは崑岡こんこうより出いづ。黄金は、雲南省麗江府の河より産出し、玉は西蕃に跨つた廣大な崑崙山の背より現出すると云ふ。水より生ずと云へば砂金であらう。玉と云へば、水晶、瑪瑙、金剛石等の礦物。併し普通に玉と云へば、飴色の如き鈍色にして光澤ある寶石を謂ふ。又其れには紫玉もあれば、碧玉もある。

劍號巨闕。珠稱夜光。

劍けんは巨闕きよけつと號ごうし。珠たまは夜光やかうと稱しょうす。

〔叙事釋名目〕に云く、「吳に干將、鑊はく耶やあり。越えつに純鈎じゆんこう、湛盧たんろ、豪曹ごうそう、魚腸ぎよちやう、巨闕きよけつの諸劍あり。(中略)、皆陸にては馬牛を斷り、水にては鴻雁を撃つ。敵に當る時は、則ち甲盾かぶたてを斬る。此れ天下の名器なり」と。前句の「金生」より此句を起し、又「玉出」

より次の夜光の珠を引起す。

玉と云へば山より出づと云ひ、珠と云へば海より出づると云ふ。然れば眞珠貝の珠であらう。夜光とは、文字の如く、夜中にも光輝を放つを謂ふ。楚國の臣に、隋侯と云へる者あり。將に殺されんとした所の蛇の命を助けたれば、其の後蛇一箇の玉を含み來たつて、隋侯に與へて酬いられた。此の珠、夜中と雖ども光を放つ。故に「夜光の珠」と稱せりと。是れ亦前句の「玉出」より縁を受けて、韻を合はせた者。「隋侯の珠」と云ひ、「卞和の璧」と云ひ、皆玉についての有名なる故事である。隋珠の方を少し許り掲ぐれば、

〔日記故事大全〕下、「德報類」の處に、

隋侯往齊國。見一蛇在沙中。頭上有血。隋侯以杖挑放水中。而去。後回至蛇所。乃見蛇啣一珠。來。隋侯不敢取。夜夢脚踏一蛇。驚覺。乃得珠。光明如月之照。世號爲隋侯珠。隋侯、姓祝、とある。

る。

又〔搜神記〕には、

隋侯見大蛇被傷。以藥活之。後蛇還報以珠。其大徑寸。純白而夜有光明。如月照。一名隋侯珠。一名明月珠。(十訓抄卷一)

併し古來の傳説であるから、何れの方が正しきかは、後世之を判別する事は出來ない。兎に負「珠稱夜光」の材料は、斯かる傳説中から取り來つたのである。○徑寸とは、玉の大きさの直徑が、一寸あると云ふ事。

果珍李柰。菜重芥薑。

果は李柰を珍とし。菜は芥薑を重んず。果物に於いては李の酢桃や、柰の唐梨を珍重し、野菜類では、辛しや生薑を珍重する。〔論語〕郷黨篇に、
不撤薑食。不多食。

とある。註に「薑は神明に通じ、穢惡を去る。故に撤てず」と。總て辛き者は、芥でも薑でも唐辛でも、其の量を少なくせば、胃に刺戟を興へて食慾を増加し、又濕氣を除去すると云ふ。又酒肴には、李を冷水に浸して供する事あり。柰とは林檎の一種、即ち紅林檎とある。

海鹹河淡。鱗潛羽翔。

海は鹹く河は淡はし。鱗は潛み羽は翔ける。千字中同字を用ひずして、而も二句目に押韻するゆゑ、諸事百出。然れども其の中、自ら萬物の發現順序や、歴史の經過順序などあり。平に思ふ所の者に非ず。

海水は鹽辛く、河水は淡泊とて、味ひ薄し。即ち河水や井水や泉水などの味を謂ふ。是れ亦前句の「李薑」などよりの敷演。巧妙限り無し。鱗は魚類、羽は鳥類。魚類は水中に潛み、鳥類は空間を翔けり飛ぶ。

龍師火帝。鳥官人皇。

龍師火帝。鳥官人皇。

太古に太皞伏羲氏の時、龍馬、圖を負うて洛水より出でたるを以て、龍を以て官名と爲し、伏羲を龍師と號す。又左傳に、太皞氏、龍を以て紀す。故に龍師と爲すとある。之は伏羲が、此の河圖に依つて、易の八卦を創始したるを謂ふのである。八卦とは、☰乾(天)、☵兌(澤)、☲離(火)、☳震(雷)、☴巽(風)、☶坎(水)、☷艮(山)、☷坤(地)。此の八卦よりして、始めて文字の起源を爲す。

火帝は、伏羲の前燧人氏出で、燧を鑽つて人に火食を教へたりと云ふ。燧を鑽るとは木を磨り合はせ、又は石を打つて火を出だすを謂ふ。故に燧には打火との訓あり。今は火打と訓す。金と石とに由つて火を取る事。鑽るとは、厚板の中央に、凹處を設け其の上を木針にて、速に磨擦する事。故に鑽ると云ふ。又普通の燧は、鐵片を以て角

石を急打して火を出だす。

鳥官は、少皞金天氏の時に、鳳凰出でたれば、鳥を以て官に名づくると云ふ。人皇とは黄帝軒轅氏を謂ふ。此の黄帝の時、蒼頡と云ふ者が、鳥跡、蟲文、山川、草木、日月等を見て、象形文字を創始した。故に人間始めての、皇たるの意で、人皇と稱し、而して次に「文字制定」の事を述べんとするのである。或説では、「天地開闢の三氏、即ち天皇、地皇、人皇の三氏の中の、人皇氏である」と曰ふ者あれども宜しからず。理由は、次句の「文字制作」に無關係であるから。其處で次に、

始制文字。乃服衣裳。

始めて文字を制し。乃ち衣裳を服す。

前の人皇即ち黄帝の時、蒼頡と云ふ者始めて文字を制作した。之を象形文字と云ふ。

○(日)。夕(月)。山(山)。川(川)。艸(艸)。魚(魚)。鳥(鳥)。馬(馬)等。此の象形

文字よりして科斗文字と爲つたので、之を古文と稱する。其れより一千八百年も經過して、周の宣王の時に、史籒と云ふ者が、古文を變じて、大篆を製作した。爾來小篆、隸書、八分、章草、草書、行書などを経て、最後に楷書に成つたと云ふ。

又黄帝の時胡曹と云ふ臣に勅して、始めて衣裳を作らしめたと云ふ。衣とは上服、裳とは下服。我が國の袴は、是れに由つた者である。然れば衣裳の出來ざる以前はと云ふと、木の皮や獸皮などを被てゐたのであらう。

推位讓國。有虞陶唐。

位を推し國を讓る。有虞陶唐。

斯くて人間生活が立派に成立したから、天子にも堯と云ふ聖帝が立つて天下を治め、老いて帝位を舜に推し讓り、舜帝は又次の禹王に國を讓つて、禪讓と云ふ國體が開始せられたのである。故に有虞陶唐と云ふ。有虞は、舜の氏とも代とも稱す。故に史上

に帝舜有虞氏と稱す。又虞を時代の名として虞舜とも稱する。陶唐も同様で、帝堯陶唐氏と稱し、又唐堯と熟字して、堯の時代を唐とも稱する。韻を叶はす爲に、「唐堯、虞舜」を逆に綴つたのである。

弔レ民 伐レ罪。周 發 殷 湯。

民を弔ひ罪を伐つ。周發殷湯。

此れも叶韻の爲に、周と殷とを逆に綴れり。前述禹王の世を夏と稱し、數百年の子孫桀王に至つて、暴逆無道。故に湯王が起つて、斯く苦しめられつた民衆を弔問し罪惡多き桀王を征伐して之を滅し、自ら王位に上る。殷湯が即ち其れである。始め世を商と稱し、中頃盤庚と云ふ王に至つて、殷に遷都した爲め、商を殷と改む。尙ほ湯王の事は、「書經」仲虺之誥篇に次の如く出てゐる。

乃葛伯仇餉。初征自葛。東征西夷怨、南征北狄怨。曰奚獨

後予。攸徂之民、室家相慶曰。後予后。后来其蘇。民之戴

商、厥惟舊哉。

と。后は君、即ち湯王を謂ふ。斯くて湯王は、夏の桀王を伐ち、天下の民衆を安泰ならしめたのである。然るに其の湯王の子孫が數百代續いた後には、又紂王と云ふ前述桀王に一段の惡辣を加へた暴君が出現して、無辜の民衆や、宗室の重臣どもをも逆待する故、周の文王出て諫めれば、文王は羸里と云ふ處に幽囚せられ、其の子武王名は發と云ふ者出でて、紂王を滅し、再び太平の代を開かれた。之を周の代と稱す。夏、殷、周三代と稱する者は、此の夏の禹王、殷の湯王、周の武王の三代を指すのである。三代とも其の始祖の代は、全く文明の聖世であつたのである。堯、舜、各一代○夏九年○殷、凡二十八主、六百四十年○周、凡三十七主、八百六十七年

坐朝問道。垂拱平章。

朝ちやうに坐ざして道みちを問とひ。垂すゐ拱こうして平へい章しやうす。

前述堯、舜より、禹、湯、武王等に至るまで、聖賢の君は、朝廷に安坐して、太師や宰相などに治道を問ひ、自分では只だ手を垂れて拱こうし、總てを百官に任せて天下を平に彰さかに治ちむ。拱とはこまぬきすとして、右手を左手で抑おさへ、拇指むすびを組み合はせて、膝上に其の儘安置する事。其の壓へた手を其の儘離さず胸に當てて立禮するを「揖いっの禮」と云ふ。垂拱を「衣裳を垂れ、手を拱こうきす」との説は宜しからず。

愛あい育いく黎れい首しゆ。臣しん伏ふく戎じゆう羌きやう。

黎首れいしゆを愛あい育いくし。戎羌じゆうきやうを臣しん伏ふくす。

聖帝賢王は、前述の如く政治を百官に任せて、自分は垂拱無爲にして天下を治め、黎首として、頭髮の黒き民衆を愛撫し育成す。黎とは、黔けんと俱くに黒いと云ふ事。之は、百官は其れ其れ一定の冠かんを使用すれども、一般の民衆には冠かんがなく、黒頭の儘である。

から、黔首けんしゆとも黎民れいみんとも稱する。戎羌じゆうきやうとは、西方の蕃族はんぞくを云ふ。臣伏しんふくとは、中國の臣と稱して伏従して叛かざるを謂ふ。併し西方には限らない。東夷とうい、西戎しじゆう、南蠻なんばん、北狄きたてきと云つて、四圍未開の蕃族の稱。今は其の一を擧げて、叶韻せしのみ。故に四方未開の蕃族まで、残らず聖帝賢王に伏従すとの意である。其處で次に又其の意を敷演ふくえんして、

遐か邇じ壹いつ體たい。率そつ賓ひん歸き王わう。

遐邇かじ體たいを壹いつにし。率そつ賓ひん王わうに歸きす。

遐は遠、邇は近として、近き中國も遠き四圍の蕃民も、聖主と一體と爲り、即ち帝王は頭首にして、大臣は左右の手。其の他一般民衆は、胷たむと兩足と成つて、上は下を愛し下は上を敬して、聖王の德に靡なき従ふを謂ふ。率賓そつひんは「率土の濱ひん、王土に非ざるはなく」、「普天の下、王臣に非ざるはなし」との略語で、津津浦浦に到るまでの民衆が、悉く中央の王に歸服すとの意。賓濱ひんひん、音義並に通ず。

鳴鳳在樹。白駒食場。

鳴鳳樹に在り。白駒場に食む。

二句共に聖王の徳化の普及せるを述ぶるのである。聖帝の代には、瑞鳥の鳳凰が出て鳴き、且つ來儀すと云ふ。傳説に、「鳳凰は、梧桐に非ずんば宿せず。竹實に非ずんば食はず」と云ふ。只だ一種の形容と云ふ者である。老竹に實は就るも、食ふに堪ふべき者ではない。白駒は白色の仔馬。故に駒を小馬と訓す。小馬が居らば、老馬も居らう。其れが穀物收納場などに居つて、穀を食むと云へば、如何にも平和にして、聖王の徳に化せられて、禽獸までが其の所を得て、安居しをるを形容するのである。鳳凰については、「書經」益稷篇に、
簫韶九成。鳳凰來儀。
とある。韶は舜の音樂。簫は樂器。雄を鳳と曰ひ、雌を凰と稱す。來儀とは、容儀を

整ふとて、兩翼を廣げて來たり舞ふ意。

又白駒については、「詩經」白駒篇に、

皎皎白駒。食我場苗。繁之維之。以永今朝。

とある。註に白駒は賢者が乗る所の馬とある。又水經の註にも、武陽龍尾山の仙人が白馬に乗つてゐたと云ふ。

又曹攄の詩に。思賢詠白駒。

とある。然れば昔より白駒は、賢者や仙人の乗る者と爲つてゐたようである。右に依つて我國の歴史を回顧すると、源の頼朝に二名馬あり。一を池月と云ひ、一を磨墨と云ふ。然るに梶原景季に頼朝が磨墨を與ふる時に曰く、「池月は予が乘なり」と。其の池月とは、白馬であつた。今一つは、申すも畏けれども、今上陛下の御乘馬は、白雪と云つて、やはり白馬である。故に本文にて「鳴鳳在樹」「白駒食場」と曰へば、俱に芽出度き故事を使用したので、聖賢の君が世を治めたる事を形容するには、

最も適切であらう。食場の二字も、詩經中の「食我場苗」より取材した者であらう。此の「場の苗を食ふ」と云ふのも、君子の乘れる馬ゆゑ、我が苗を食ふのを卻つて善しとして、歓迎した詞である。即ち君子の乘馬が、我が苗を食ふのを繼ぎ留めて、せめて今朝の一刻でも、慰め奉らんと意である。

化被草木。頼及萬方。

化草木に被り。頼萬方に及ぶ。

聖帝賢王の徳化は、獨り人類や畜類のみならず。情なき草木までも被り及び、従つて又其の信賴して手頼るべき仁慈は、諸方萬法、残る隈なき各方面にも及び傳はるとの事。

〔書經〕呂刑篇に

惟敬五刑。以成三徳。一人有慶。兆民頼之。其寧惟永。

五刑、五種刑罰。明、剛、柔、及正直。大辟、三徳。剛、柔、及正直。

とある。本文頼の字は之れと同様である。

蓋此身髮。四大五常。

蓋し此の身と髮と。四大五常。

以上は主として治者の方面を叙述せしゆゑ、此の句よりは、被治者の側について叙述するのである。抑も吾等が此の身體及び髮膚は、父母の遺體である。〔孝經〕第一章に身體髮膚。受之父母。不敢毀傷。孝之始也。

とある。全く此の大切な身體を毀ち傷つけてはならぬ。

四大とは。地、水、火、風で、之を外の四大と稱し、之に對して内の四大と云ふ事がある。堅、濕、煖、動である。此の内外の四大が因縁に因つて結成せられたる者が、

吾人の身體と云ふ事である。今少し委しく言ふと、身體の根幹を成す所の骨や肉などは、地大の堅に屬し、目汁、鼻汁、及び血液等は、水大の濕に屬し、自らなる體温は火大の燥に屬し、行動坐作の進退自由なるは、風大の動に屬する。故に一たび死魔に襲はるるや、第一に退卻する者は、風大の呼吸と活動とである。第二には、體温冷卻。即ち火大燥の退卻。第三には水大濕の退卻で、液體悉く盡きて、干燥物の如くになる。最後の第四には、乾燥し盡きて白骨と成つた者が、地大堅の退卻に因つて風化し、更に虚空の如く全くの無の滅盡に歸著し終はるのである。併し斯く有形の物質的は死滅に歸しても、無形の精神的精靈的の業力が不滅であるから。之を永久に活かすべく、平素よりして心懸けねばならぬと説くのである。次に五常とは、仁、義、禮、智、信、即ち五種の常に守るべき道を謂ふ。換言すれば大切な身體髮膚を毀傷せずして孝を全うするには、此の五常の道を堅持せねばならぬと説くのである。「孝經」の前句の次に、

立身行道、揚名於後世、以顯父母、孝之終也。

とある。之を全うするには。何處までも此の五常を守らねばならぬと云ふのである。

恭惟鞠養。豈敢毀傷。

恭しく鞠養を惟ひ。豈に敢て毀傷せんや。

受け難き此の身を受けたる以上は、謹んで鞠と養ひ育て、身も心も立派にして、君父の鴻恩を忘れてはならぬ。従つてどうして、敢て毀ち傷つくる事が出来ようや。常に身體を毀傷せざるのみならず、心をも傷つけてはならぬ。其處で其の心得を次句に綴つて、

女慕貞絜。男效才良。

女は貞絜を慕ひ。男は才良に效へ。

女子の特に大切なるは、節操正しくして、行爲が皎潔でなくてはならぬ。潔は潔に同じ。清く又いさぎよし。貞は正しい。男子は才能ある者や、令徳ある者に效ひ其れを手本として、精神修養すべきである。

知^レ過^レ必^レ改^レ。得^レ能^レ莫^レ忘^レ。

過を知らば必ず改め。能を得ば忘るること莫れ。

〔論語〕學而篇に、

子曰、過^レ則^レ勿^レ憚^レ改^レ。

又〔春秋左氏傳〕の中に、

晉士季諫君曰、人誰無^レ過^レ。過^レ而能^レ改^レ、善莫^レ大^レ焉。

又〔論語〕衛靈公篇に、

子曰、過^レ而^レ不^レ改^レ、是謂^レ過^レ矣。

過失と云ふ者は善い者ではない。女中が茶碗を落して、其れが壊はるるのも過失である。善い事ではない。壊はさない方が善い。併し所謂過つておとしたのであるから、改めて以後を特に能く注意すれば、「善これより大なるはなし」と云ふのである。然ればとて又再再されては困る。故に〔論語〕に、顔回を孔夫子が褒めて曰ふに、

哀公問、弟子孰^レ爲^レ好^レ學^レ。孔子曰、有^レ顔回者^レ好^レ學^レ。不^レ遷^レ怒。

不^レ貳^レ過^レ。不幸短命死矣。今也則^レ亡^レ。未^レ聞^レ好^レ學^レ者^レ也。

哀公は魯國の君。顔回は三十一歳にして歿せり。宜しく暗誦すべき格言である。

能とは藝能と熟字する。藝には遊藝と道藝とがある。道藝とは、禮法、音樂、射術、御馬、書方、數學の六藝。遊藝とは、是れ以外の心身を樂しましむる者。此に言ふ能とは、道藝の能事である。一度覺えたならば、忘れてはならない。常に心懸けて居らねばならぬ。

罔^レ談^ニ彼^一短^一。靡^レ恃^ニ己^一長^一。

彼の短を談ずること罔かれ。己れの長を恃むこと靡かれ。

引續いての修養談である。彼とは他と云ふに同じ。即ち他人の短所や缺點などを取り出して話しなどしてはならぬ。之に反して又自分の長所や美點を恃みにして、誇るよ
うな事があつてはならぬ。大に控へ目に慎しまねばならぬ。罔も靡も俱に勿れに同
じ。之は詩式の上より言つて同字を重ねてはならないから、斯く文字を異にするので
ある。千字も綴つて理想を述べ乍ら、一字も同字を使用せざる所に著眼せねばなら
ぬ。中中容易な業ではない。

信^レ使^レ可^レ覆^一。器^レ欲^レ難^レ量^一。

信は覆すべからしめ。器は量り難からんを欲す。

信とは人間の言と云ふこと、即ち人と言との合字。然れば人と云ふ者は、虚偽を言ふ
べき者ではないと確信せねばならぬ。覆は復に通じて、一度言つた事なら、其の言つ
た通りに復し行つて間違はないを謂ふ。所謂言行一致。一度言ひ放つたならば、必ず
實行する。行ひ得ざる事ならば、言つてはならぬ。固より當然の事。

又人の器としての價値は、他人より量り知られないやう、見すかされざるやうありた
し。其れには濫りに多言せぬ事。輕率な行爲の無いやうに心懸くべし。器と云ふにつ
いて、「論語」爲政篇に

子曰、君子不器。

朱子の註に云く、「成徳の士は、躰具はらざる無し。故に用、周ねからざることに無し」
と。器と云へば一方に限定するから。然るに次には又同公冶長篇に、

子貢問曰、賜也如何。子曰、女器也。曰、何器也。曰、瑚璉也。

とある。瑚璉とは簠簋と云つて、御先祖の祭に、黍、稷と云ふ穀物を盛る所の器で、

飾るに玉を以てしたる貴重にして、又華美なる器と云ふ事である。篋たけかご篋たけかごは俱に竹籠の平皿。篋たけかごは外方ほかにして内圓うち。篋たけかごは内方うちにして外圓ほかなる者。黍あはは大きおほび、稷あはは小こきび。即ち黍あはは今の高粱こうりやん。稷あはは粟あはの事。支那北部にての主なる食糧品。併し我が神國にての器は、教育御勸語の中に、

學を習ひ、業を修め、以て智能を啓發し、徳器を成就し、とある。然れば吾人の身體は、道德を入るる所の器うつはでなくてはならぬ。便ち盛るに人倫道德の有用物を以てすべきである。盗心や惡癖などを盛つてはならぬ。

墨 悲 絲 染。 詩 讚 羔 羊。

墨ぼくは絲いとの染そまるを悲かなしみ。詩しは羔羊こうやうを讚さんす。

墨ぼくとは墨翟ぼくたくとて、孔子より後、孟子より少し前位の哲學者で、兼愛説けんあいの論客である。儒教の仁にに似て非なる博愛論者である。此の人、或時人の白絲を染むるのを見て悲

しんだ。と云ふのは、白き絲は、美しき赤にも、美しからざる黒にも、美惡何れにでも染め得るから。恰も人間は同一であり乍ら、或は善人にも、或は惡人にも、爲し得らるるから、斯く悲しんだと云ふのである。又之れに對して「楊朱は岐路きろに泣く」と云ふ事がある。楊朱は、墨子とは正反對の學説で、儒教の義ぎに似て非なる所の「爲我わが的論者」である。或時道路の岐路わかに臨み、右すべきか左すべきか。右にも行かれる、左にも行かれる。即ち善惡の二道に對して、何れの道にも行かれるから泣いたとの由。總ての人が、善の道に行けば心配は無けれども、兎角惡道の方に行き易いから、善惡二道の岐路きろに臨んで泣いたと云ふのである。

〔淮南子〕と云ふ書の、説林訓せいいんくんと云ふ所に、

楊朱見岐路而哭之。爲其可以南スベキガナ可以北スナリ也と。

哭とは、泣く事。岐路は別れ道。

又前文の續きに、

墨翟見練絲而泣之。為其可以黃可以黑也。

楊子も墨子も共に立派な哲學者であつたけれども、儒教より言ふ時は、仁義の道に似て非なる者として、孟子は頗る二氏の學説を排斥したのである。其れも參考の爲に少し許り出せば、

〔孟子〕卷二滕文公下篇に、

聖王不作。諸侯放恣、處士橫議。楊朱、墨翟之言盈天下。天下之言、不歸楊則歸墨。楊氏爲我。是無君也。墨氏兼愛、是無父也。無父無君。是禽獸也。(中略)楊墨之道不息、孔子之道不著。是邪說誣民、充塞仁義也。仁義充塞則率獸食人、人將相食、吾爲此懼。衛先聖之道、距楊墨、放淫辭。(中略)聖人復起、不易吾言也。

又〔孟子〕卷四盡心上篇に、

孟子曰、楊子取爲我。拔一毛而利天下不爲也。墨子兼愛、摩頂放踵、利天下爲之。子莫執中。執中爲近。執中無權、猶執一也。所惡執一者、爲其賊道也。舉一而廢百也。

楊子は、我が爲にするを取る。義に似て非なる一方的である。

墨子は、兼ね愛して、天下を利するを取る。仁に似て非なる一方的である。

子莫は、中を執るに偏して、權道のあるを知らず。やはり一方的である。

又同卷二滕文公上篇に、

墨之治喪也、以薄爲其道也。

天下の財を惜み儉約して、父母の葬式までをも、極めて薄くせんとの主義者である。又〔莊子〕天下篇に、

墨子、作爲非樂、命之曰節用。生不歌、死無服。汜愛兼利而

非^{ヒト}聞^{カヒテ}。其道不^レ怒^ヲ。又好^{コソシテ}學^ブ而博^{ヒク}不^レ異^{ナリ}。不^レ與^ニ先^王同^{ジカラ}。毀^{コボツ}古^ノ之^レ禮^イ樂^ヲ中^ニ略^ス。今^ハ墨^子。桐^ノ棺^ヲ三^寸而無^シ槨^ヲ。以^テ爲^ス法^式。以^テ此^ヲ教^フ人^ヲ。恐^ム不^レ愛^セ人^ヲ。以^テ此^ヲ自^ラ行^ハ。固^{ヨリ}不^レ愛^セ已^ヲ。(中略)其^ノ生^ヤ也^{ナリ}。勤^メ其^ノ死^ヤ也^{ナリ}。薄^ク其^ノ道^ヲ大^ニ穀^ヲ。不^レ潤^シ使^シ人^ヲ憂^ヘ。使^シ人^ヲ悲^マ。其^ノ行^ヒ難^キ爲^ス也^{ナリ}。恐^ム其^ノ不^レ可^ク以^テ爲^ス聖^ト人^ノ之^レ道^ト。反^シ天^下之^レ心^ヲ。天^下不^レ堪^ハ。墨^子雖^モ獨^リ能^ク任^ズ。奈^ニ天^下之^レ何^ヲと。

併し本文の善言は善言。人物の如何を以て、善言を没却する事は出来ない。

墨子には「墨子」と云ふ書がある。十五卷。「周の墨翟撰す」と題せり。頗る難解の書である。楊朱の書は、世に傳はらない。只だ列子の中に、「楊朱篇」があるのみ。而して其の楊朱と云ふ下の註に、次の如く出てゐる。

或^ハ云^フ字^ハ子^シ居^キ。戰^國時^ノ人^{ナリ}。後^ニ於^テ墨^子。楊^朱與^ニ禽^滑釐^之辨^論。其^ノ說^ハ、在^リ愛^シ己^ヲ不^レ拔^ク一^毛以^テ利^ス天^下。與^ニ墨^子相^反と。(禽滑釐は、楊朱の門人)

墨子の兼ね愛すとは、鄰の父も我が父も同じ父であるから區別をしない。鄰の子も我が子も同じ子であるから、分け隔てをしないと説くのである。博愛は博愛であるけれども、人情を没却せり。故に仁に似て非なりと論ずるのである。楊子の我が爲にすとは、日蓮宗に「不受不施派」と云ふ一派がある。克く似てゐる。併し社界生活と云ふ者を解してゐない。頭の徹邊から足の爪先きに到るまで「人の爲には利せず」と論ずるのであるから。殆ど動物同然。只だ人の世話に爲らぬと云ふだけでも、實際上行はるる者ではない。人類間は所謂相愛的でなくてはならぬ。共存共榮的でなくてはならぬ。救ひ合ひ助け合ひでなくてはならぬ。故に孟子は、極力之を排斥した者である。序を以て略説如^シ是^ノ。

羔羊三章。(詩經卷一、召南中の一節)

羔^羊、鵲^巢之^レ功^致也^{ナリ}。召^南之^レ國^ヲ。化^シ文^王之^レ政^ヲ。在^リ位^ニ皆^節儉^シ。正^直。德^如羔^羊也^{ナリ}。

之は小序として、此の羔羊篇の大體の主意を述べたのである。其處で本文は

○羔羊之皮。素絲五純。退食自公。委蛇委蛇。

○羔羊之皮。素絲五絨。委蛇委蛇。自公退食。

○羔羊之縫。素絲五總。委蛇委蛇。退食自公。

裘には狐裘と云ふのがある。狐の皮衣で一番上等の高級品である。羔羊とは小羊。狐は得難きも、小羊は到る處に居る。故に羔羊の皮の裘は下等物である。恰も狐裘が絹織物ならば、羔裘は木綿著物の如き者。然るに當時聖徳ある文王の徳に感化せられて朝廷の家老どもが、安直な羔裘を著て役所に出入し、而も委蛇然として自得して、贅澤の念なく、眞面目に政治に従事してゐると云ふ事を詠じたのである。故に「讚羔羊」とは、節儉にして、正直なる徳を有してゐるのを、賞讃すとの意である。韻字を叶はす爲に、斯かる複雑な故事を綴り込んだのである。皮とは表に毛の附いてゐる者。素絲は白の絹絲。五純、五絨、五總とは、袖や袂に白絲にて、五箇處荒縫して、

末端を總の如く餘したる者。退食は、公舎の彼所より退去して夕食を取る事。委蛇は自得の貌とし、寛容にして通らざる意。

委蛇はイイと讀むべき意なれども、韻を叶はす爲に、イダと讀んだのである。

以上第一句の句末黄の字より、第二句目の、荒、張、藏、陽、霜、岡、光、薑、翔、皇、裳、唐、湯、章、羌、王、場、方、常、傷、良、忘、長、量、羊、の二十六字は、皆平聲陽韻の字である。此處で一應平韻を打切つて、次には仄韻が使用してゐる。故に以上を以て「第一段」と爲し、次を「第二段」と爲す。之れが古詩の韻法である。つまり「古詩長篇」の詩式と云ふ者である。

景行維賢。克念作聖。

聖の三角點は、仄韻との符號である。以下皆然り。

景あはいに行おこなへば維これ賢けん。克よく念おもへば聖せいと作なる。「景を大なりと訓する事は、詩經中各處にある。大なる行ひとは、人の手本と爲る如き、立派な君子の行ひを謂ふ。仁義禮智の五常を行ひ、君臣義あり、父子親あり、夫婦別あり、兄弟友あり、朋友信ある五倫の道を行ふのも、此の景行である。故に維れ賢なりと云ふ。賢とは、かしこき人。克く念へば間違ひがないから、聖人君子とも作り得るとの事。「書經」多方篇に、

周公曰、惟コレ聖セイ罔モナク念フコト作ル狂。惟レ狂モ克コク念ハ作ル聖。

とある。誠に立派な格言である。縦ひ聖人でも、善惡について念ふことが無ければ狂人と爲る。之に反して狂人でも克く念へば、聖人とも作るとの意。又「論語」爲政篇にも、

子曰、學シテ而ズ思ハバ則チ罔ク。思ウテ而ズ學バ則チ殆シ。

とある。物事を爲すには、善なるか惡なるか、能く能く之を思ひ考へて惡を避け善を爲さねばならぬ。聖とはひぢりとして、智慧や徳が、幾千萬の人にも優れて、世を救ひ人を感化する程の人物を謂ふ。ひぢりとは、或は「火知り」かも知れない。木火土

金水の五行の中、木土金水の四行は、形があるから誰れでも知り得るけれども、太古にて未だ物を煮て食ふ事を知らざる時代に、形なき火を發見して物を熟食する事を教へた人があれば、其れが即ち聖と云ふ火知りであらう。何れ深山中にて、木と木との摩擦などからして火を發したのを見て、火の事を知つたのであらう。

前句の羔羊までが、平聲陽韻であるが、此の聖より前の景行の句を合せて、下「去而益詠」に至るまでの三十句は、去聲敬韻である。但し中には去聲徑韻の字もある。之は敬と徑とが通韻であるから、文字の都合上、並用したのである。

徳建名立。形端表正。

徳建とくだてば名立なたちち。形端かたちたしければ表正おもてただし。

徳は得なりと云つて、學んだ道を自己に行ひ得て、吾が物にしたるを謂ふ。故に只だ博く知つただけでは、徳とは言はれない。道とは人道を謂ふ。人道とは、五倫五常の

道を謂ふ。人生一日として無かるべからず。臣にして君に忠節を盡すも徳。子にして親に孝養を盡すも徳。博愛衆に及ぼすも徳。國憲を重んじ、國法に従ふも徳。滅私奉公。悉く是れ徳ならざるはない。故に此の徳が建設せらるれば、則ち名と義とが成立して、世の尊崇を受く。特に高き者は、遂に神格視せらるる。我が國著名の都市に、別格官幣社の建立せるは、皆此の「徳建てば名立つ」所以の者でない者はない。近くは乃木神社だの、東郷神社だの、皆然らざるはなし。

次に形端しとは、坐作進退、總て此身を持つ事の嚴正なるを謂ふ。操持嚴正なるが故に、表の顔面も正しく、従つて他よりの輕侮を受くる事はない。「論語」學而篇に、

子曰、君子不重則不威。

とあるも、此處の道理。又「孟子」離婁上篇に、

夫人必自侮然後人侮之。家必自毀而後人毀之。國必自伐而後人伐之。

とある。之は本文の反對の側を述べた意味になる。故に人は苟も理由なくして笑ふべき者ではない。常に端正なる態度を持つて、顔色亦平靜なるを要す。端とは正しと訓する。表を又表面に現はるゝ事件とも解する事が出来る。即ち己れが氣を附けの態度で嚴然たれば、人吾れを誑惑する事を得ず。自ら正義を以て吾れに對する。御互ひに斯くならざるべからず。

空 谷 傳 聲。 虛 堂 習 聽。

空谷聲を傳へ。 虛堂聽を習ぬ。

山中にて空間の廣き谷で物言へば、其の反響を飭すと云ふ。其れの如く徳建てば、令名は自ら響き渡る。今一つ形容すると、虛堂とて、何もない廣い座敷で物言へば、自ら亦響きて聞こゆる如く、美名は他に傳ふ。習を重ぬと讀むのは、他の句に重の字があるから、其れを避けたのである。復習などと綴るから重ぬるとの訓もあるわけ。

禍因_ニ惡積。福緣_ニ善慶_△。

禍は惡の積むに因り。福は善慶に緣る。

禍とは事物を害するを謂ふ。詐欺や盜賊の如き惡を積めば、此の身を刑務所内に苦しむる。福とは、事物に幸ひあるを謂ふ。善き處の慶びを爲さば、人よりも褒められ、官よりも褒賞を賜はる。因緣と云へば、正因助緣と解すれども、此處では只だ文字を變へたのみで、俱に原因する意味に解する。「易」の文言傳に、

積善之家、必有餘慶。積不善之家、必有餘殃。と云ふのも同じ事。

祖先が善事を積み行へば、其餘澤が子孫に及び、之に反して不善な行爲を積めば、其餘れる殃が子孫に酬ふと云ふのである。併し其れは助緣と云ふ者で、正因は、總て自己の行爲の善惡に因つて、善慶と惡殃との結果が我が身に報ふ。當然の事であ

る。

又俚言に、

口は禍の門。舌は禍の根。

と云ふ事もある。之は惡口雜言、乃至誹毀、罵詈等の惡を起すに因つて、此身に害を蒙るを謂ふ。併し一方には又善言と云ふ事もある。菩薩の四行願と云つて、布施、愛語、利行、同事と云ふ事がある。此の中の愛語と云ふのが、福を招くの善慶である。

曹洞宗の開祖道元禪師は、「正法眼藏」の中に次の如く言つてゐる。

愛語と云ふは、衆生を見るに、先づ慈愛の心を發し、願愛の言語を施すなり。徳あるは讚むべし。徳なきは憐むべし。怨敵を降伏し、君子を和睦ならしむる事、愛語を根本とするなり。面ひて愛語を聞くは、面を喜ばしめ、心を樂しくす。面はずして愛語を聞くは、肝に銘じ魂に銘ず。愛語能く回天の力ある事を學すべきなりと。實に至言である。努めて善き慶を積まねばならぬ。

尺璧非寶。寸陰是競。

尺璧は實に非ず。寸陰是れ競ふ。

〔淮南子〕原道訓の中に、

聖人不貴尺之璧。而重寸之陰。時難得。而易失也。

とある。又魏の文帝の〔典論〕にも、

古人賤尺璧。而重寸陰。懼時之過耳。

とある。皆同意味である。尺璧とは、直径一尺の玉と云ふこと。無論寶石として貴重すべき者であるけれども、固より絶待的の者ではない。世の中を益する事幾許ぞ。其れよりか、學問して智識を増し、善徳を積んで、世を益するに過ぐる者なし。故に此の語を綴る。

次に寸陰とは、僅かの光陰と云ふ事で、光陰とは時間の事である。日の陰を度れば、

陰が眞北に爲る時は正午で、少し一寸許りでも其の陰が西へ傾けば、午後一時頃と爲り、更に傾けば二時か三時かに爲ると云ふ工合。故に此の時間を惜んで、學問を競争して勉めよとの事。晉の陶侃曰く、

大禹聖者。乃惜寸陰。衆人當惜分陰。

又宋の朱熹の詩に云く、

少年易老學難成。一寸光陰不可輕。未覺池塘春草夢。階前

梧葉已秋聲。

と。全く然り。一寸や一分の光陰、即ち僅かの時間をも、爲す事なくして、空しく過ごしてはならぬ。

資父事君。曰嚴與敬。

父に資りて君に事ふ。曰く嚴と敬と。

父に事ふるに嚴と敬とを以てする。其の義を資つて我が君に事ふべし。故に曰く、おごそかなる嚴と、慎みうやまう敬との道を盡せよとの意。敬とは敬ふ心を謂ふ。敬に對して恭がある。恭はうやうやしと訓して、敬意を身體に現はすを謂ふ。

孝當竭力。忠則盡命。

孝は當に力を竭すべし。忠には則ち命を盡せ。

〔論語〕學而篇に、

子夏曰、賢賢易色、事父母能竭其力、事君能致其身、與朋友交言而有信、雖曰未學、吾必謂之學矣。

とある。やはり本文の文字は、斯かる所より出でた者であらう。父母に事へて孝を致すには、我が力のある限りを竭さねばならぬ。實は斯く言ふ者の、實際力を竭すと云ふ事は、やさしい事ではない。一の決心が必要である。又君に忠を盡すと云ふのも、

支那では早や昔の事。此れ許りは、世界中只だ我が帝國のみ、此の言を遵奉して實行せり。命は生命である。一旦臣として君に仕へた以上は、生命を差し出す底の者でなくてはならぬ。「爆彈三勇士」と云ひ、眞珠灣に於ける「九軍神」の如き、全く生命を投げ出している忠である。吾れ吾れ學徒は、大に肝に銘じて感謝せねばならぬ。時に此の九軍神と云ふについて、筆者に一詩が出来た。名吟ではないけれども、趣味向上の爲に此に挿入しよう。

詠九軍神

天胤

爆彈三雄既愕人。又看東亞九軍神。神孫在上臣遵下。世界何邦有此民。

孝は元と老と子との合字。然るに一方老の畫を省略して子を加へ、以て一字と爲したる者。即ち子が老親を脊に負ふ貌。忠は中の心。即ち中味の誠實である。外の浮氣心ではない。是の如きを會意の文字と云ふ。

臨_レ深_レ履_レ薄_レ 夙興_レ溫_レ清_レ。

深_レきに臨_レみ、薄_レきを履_レみ、夙_レに興_レき、溫_レ清_レせよ。

之は君と親とに事ふる上についての注意である。凡そ何事をするにも、畏れ謹みて、

仕損ひの無いやうにせよとの意。「詩經」小雅、小旻篇に、

戰_レ戰_レ兢_レ兢_レ、如_レ臨_レ深_レ淵_レ、如_レ履_レ薄_レ氷_レ。

とある。戰_レ戰_レは震_レひ恐_レるる貌。兢_レ兢_レは戒_レしめ畏_レるる貌。其れを下の二句で形容して、

恰も深き淵に臨めば陥らんと事を恐れ、薄く張つた氷の上を履めば、破れて陥らせん

を恐るる如くに畏れて注意せよとの意。履_レは靴_レである。靴は踏_レみ歩_レる者。故に履_レを

踏_レむと訓する。

溫_レ清_レとは。冬_レ寒_レくば湯_レ、たんぼか火箱を入れて老親を溫め、夏_レ暑_レくば朝早く起きて窓を

開き、冷水を供するなど、成るべく涼_レしくする事。朝は親より先に起_レくべきを以

て、夙_レに興_レくと云ふのである。朝寢坊して、父母より起さるるが如きは、不幸の至りである。「禮記」曲禮上篇に云く、

凡_レ爲_レ人_レ子_レ之_レ禮_レ、冬_レ溫_レ而_レ夏_レ清_レ、昏_レ定_レ而_レ晨_レ省_レ。

とある。冬_レは寒_レいから溫_レくしてやり、夏_レは暑_レいから涼_レしくして上げる。昏_レとて日晩れて寝る時には、お定まりと云つて、靜かに寝る事。晨_レ省_レとは、朝早く起きては兩親の身の安否を伺ひ省みる。是れが子たる者の禮法、即ち道であるとの事。本文も是等の詩經や禮記などから、其の材料を採つたのであらう。起_レくるのを興_レと書いたのも、他の處に起_レがあるから、其れを避けたのである。清_レは清_レと異なる。清_レはきよし。清_レは涼_レに同じ。すずしい。恰も冷_レと冷_レとの如し。冷_レは寒冷とて、つめたき意。冷_レは清冷とて、清_レくすずしき意。

似_レ蘭_レ斯_レ馨_レ。如_レ松_レ之_レ盛_レ。

蘭の斯れ馨しきに似。松の盛なるが如し。

孝にも力を竭し、忠にも命を盡して、其の行ひの香ばしきは、恰も蘭花の馨りの高きが如く、又松の葉の茂つて盛なるが如くになくはならぬ。蘭と云ふと「顔氏家訓」に云く、

與善人居、如入芝蘭之室、久而自芳也。

又松と云ふについては「詩經」小雅天保篇に、

如南山之壽、不騫不崩。如松柏之茂、無不爾或承。(柏は檜に似

た木で、このてがしはと稱す。)

長安城の南にある終南山の虧げず崩れざるが如く、又松や柏樹の色を變へず。舊葉將に落ちんとすれば、新葉已に生じて、然かく相承け繼ぎて長茂する如く、天祿の疆り無きに喩ふのである。皆以て參考に供すべし。

川流不息。淵澄取映。

川は流れて息まず。淵は澄みて映を取る。

川水の流れて常に休止せざるが如く、忠孝の道は、途中で休止するような事があつてはならぬ。又其の徳の氣高くして世に現はるるは、恰も深き淵の水の清く澄み渡つて、物態の影の綺麗に映るが如くなくてはならぬとの事。

容止若思。言辭安定。

容止は思ふが若く。言辭は安定せよ。

容貌動止とて、我が身のなりふりは、心に思ふ如く、行き届いて取締りがなくてはならぬ。言辭とて言葉使ひは靜かにして、安らかに一定のきまりがなくてはならぬ。多言は之れに反する。容止も亦わざと體裁振るは、之れに反する。「禮記」曲禮上篇に、

曲禮曰、母不敬。儼著思。安定辭。安民哉。

とある。民を安んずると云へば、學問して役人と爲り、民衆に臨む場合の心得を述べた者と見ゆる。故に下人民と雖ども、能く之を敬せよ。侮慢してはならぬ。又其の態度は、儼然といかめしく眞面目を保持して、心に斯くあれかしと思ふが如く注意し、而して又言辭を安らかに靜かにし、定やかに落ち著いて物言へ。斯くあれば民衆を安んずる事が出來ようとの事。本文も是等禮記の中より取材した者であらう。

篤初誠美。慎終宜令。

初めを篤くすれば誠に美なり。終りを慎めば令しかるべし。

此の二句は互文として、「初を篤くし終を慎めば誠に美」「終を慎しみ初を篤くせば令しかるべし」と云ふ意味の文である。故に忠を致し孝を竭すにも、最初より手篤くして、最後の終りに至るまで、慎しみて仕損じが無いようならば、誠に美徳にして、其

の身も必ず亦善きを以て終はるべしとの意。令は善しと云ふ事。令嬢とか令息とか言へば、淑やかな善き娘。又善きむすこと云ふ事である。「詩經」大雅の蕩篇に、靡不有初。鮮克有終。

とある。又楊子「法言」に、

有生者必有死。有始者必有終。自然之道也。と

生あれば必ず死ある如く、始めあらば終りあらざるべからざるは、自然の道である。然るに世には、始めは善くあつても終りには善く無い者がある。之を愚人と謂ふ。愚人では、何事に於いても、決して成功する者ではない。故に人は何處までも、初めたならば、克く其の終りまでをも完全に務め上げねばならぬ。此に於いてか「誠に美」にして、又「令しかるべし」との良結果を生ずる。併し之は善事に於いて言ふ事である。悪事を始めて終りまでやられては迷惑千萬。其れでは只だ閻魔の應を賑はすのみである。

榮業所基。藉甚無竟。

榮業（えいぎふ）の基（もと）く所（ところ）。藉甚（せきじん）竟（は）り無（な）し。

斯く初を篤くし終を慎しめば、何事を營むにも必ず榮ゆる基礎と爲る。身も榮ゆれば業も榮えて、名聲甚だ盛なる事竟りなく、大に譽れを世に弘むる。弘まる事の多大なるを籍甚とも又藉甚とも綴る。併し名聲籍籍とあるから、草冠よりも竹冠の方が宜し。竟は終りとも、極まりとも訓す。是れ亦同字を避くる爲の用法。

學優登仕。攝職從政。

學優（がくゆう）なれば登仕（とうし）し。職（しやく）を攝（せつ）して政（せい）に従（したが）ふ。又人は學問して、其の學（まな）が優（すぐ）れ勝（まさ）れば、官處に登り仕へる。更に職務を攝ね治め、天下の政治にも従ひ取り行ふ。最初より大臣や大官はない。皆優學が素因を爲して、次第に上達して、昔で言へば所謂攝政

關白にも爲り得るのである。之が一般的である。太閤秀吉の如きは、例外である。

存以甘棠。去而益詠。

存（ぞん）するときは甘棠（かんとう）を以（もつ）てし。去（さ）つて益（えき）す詠（えい）ず。

甘棠には故事のある事ゆゑ、先づ其れを、

〔詩經〕國風甘棠篇に、

甘棠三章。

甘棠、美召伯也。召伯之教、明於南國。

之は此の詩の小序である。召伯とは、召公奭と云つて、周の武王を助け、又其の子成王をも助けて、天下の爲に最も善き政治を爲した大官である。而も極めて長壽で、一百八十歳であつたと云ふ。

○蔽芾甘棠。勿剪勿伐。召伯所茇。

千字文詳解

○蔽^{ヘイフツタル}芾^{フツタル}甘^{カン}棠^{タル}。 勿^レ剪^{コト}勿^レ敗^{コト} 召^シ伯^{ハク}所^レ憩^ス。
 ○蔽^{ヘイフツタル}芾^{フツタル}甘^{カン}棠^{タル}。 勿^レ剪^{コト}勿^レ拜^{コト} 召^シ伯^{ハク}所^レ說^ス。

此の蔽芾の芾につき、音廢と又音沸とある。之は蔽芾を小なる貌と解すれば音廢。又之を盛なる貌と云ふ時は、音沸と讀むべし。兩音ある所以である。甘棠は堅梨。又ケンボ梨とも云ふ。周の大官召公が、此の盛んなる堅梨の木の許に休憩し、或は此處で訴を聞いたと云ふ所から、此の樹を召公の「遺愛樹」と稱し、且つ其の召公を慕ひ敬ふ所から、時の詩人が、斯く「剪ること勿れ伐つこと勿れ」と詠じて、召公良政治の徳を追慕したとの事である。故に學優にして登仕し政に従へば、昔の召公が人民から慕はれたが如く、自己の生存中に、斯く民衆から慕はるるようにならなくてはならぬ。去而詠とは、右の故事を重ねて述ぶるので、召公は、生前良き政治を爲して、民の訴訟事を、或は此の甘棠の許にて善く聽いて、民を徳化した。依つて召公が没し去つても、此の甘棠を愛して「剪ること勿れ伐つこと勿れ」と、益す吟詠して、其の徳を追

慕せらるるのである。吾人亦然か爲らねばならぬとの意。

以上「景行維賢」より、第二句目の末字、

聖、正、慶、競、敬、命、清、盛、映、令、竟、政、詠〔以上去聲、敬韻〕

聽、定、〔去聲、徑韻〕敬と徑とは通韻。

此處で又一段。即ち第二段と爲るのである。斯く平韻、仄韻、交互に使用するのが、古詩の韻法である。故に次の一段は、又平韻と爲つてゐる。

樂殊貴賤。禮別尊卑。

樂は貴賤を殊にし。禮は尊卑を別つ。

斯くして政治を爲すには、又音樂を必要とする。併し其れには又上下貴賤の區別があるから、各々其の區別を守つて、亂してはならぬ。區別の大體を云へば、天子の樂は八佾とて、舞人が六十四人。諸侯の樂は六佾で四十八人。大夫とて家老の樂は四佾で

三十二人。士は二倍で十六人と云ふ事である。僧と云ふ字は八人の肉と云ふ字である。故に八倍と云へば、八を乗じて六十四人、六倍と云へば四十八人と云ふのである。併し之は一例である。貴賤の身分に應じて、物の區別ある事は當然である。禮も亦然りて、尊貴の方と、卑賤の人とは、敬禮と最敬禮とのある如く、多少亦其處に區別がなくてはならぬ。陸海軍人將校の襟章とか腕章とか、或は文官にしても、勅任官と奏任官とは、冠や服装などに多少の差異がある。優者を禮遇する所以である。之が物の秩序と云ふ者である。秩序が立つぬと亂雜に成る。亂雜に成つては治まらない。此の句から又平聲支韻と爲つて一段を爲す。凡そ二十二句である。

僧と云ふについて、「論語」八佾篇に、

孔子謂季氏、八佾舞於庭。是、可忍也、孰不可忍也。とある。

季氏は魯國の大夫で、最も勢力の多かつた季孫氏である。然るに彼れは僭越して、天子八佾の舞樂を吾が邸内にて行つたのである。禮法に、天子は八佾、諸侯は六佾、大

夫は四倍、士は二倍。即ち前述の通り。其處で孔子が此事を慨嘆して曰はるるには、季氏は此の如き事すら尙ほ忍び我慢して之を爲す。然れば何に事か忍んで爲すべからざらん。如何なる不法な事を爲すかも知れない。甚だ困つた事であると。之は支那は革命の國であるから、若しも不臣な事があつてはならぬと斯く慨嘆したのである。貴賤は、職分から曰ひ、尊卑は身分から曰ふ辭。

上和下睦。夫唱婦隨。

上は和ぎ下睦まじく。夫唱へて婦隨ふ。

禮法に於いて尊卑を別つけけれども、精神界は共通して、上にある尊貴の人は、心を和けて下に接し、下に居る卑賤の人は、心を睦まじくして上を親しむ氣分がなくてはならぬ。

又一家の夫婦間に於いても然りて、夫が家長であるから、善い事を唱へ出だして、婦

どもを導かねばならぬ。従つて婦どもは、其の導きに随ひ行つて務めねばならぬ。之が天地間自然の理法である。雞は誰れも教えないけれども、此の理法を本能的に實行してゐる。此に少しの餌が見つかると、雄の方が必ず呱呱と鳴いて雌を呼ぶ。雌が行いて始めて共に啄み始む。「夫唱婦隨」の天啓であらう。

外受傳訓。入奉母儀。

外傳訓を受け。入つて母儀を奉ず。

夫たるべき男子は、外へ出て師の教や、傳の仕附けを蒙らざるを得ない。傳とは、もりやくと訓する。守役であらう。又婦たるべき女子は、我が家に入つては、母の仕附を奉じ行はねばならぬ。儀は、儀式作法で、將來夫に事ふべく、又一家の内部を司るべき種々なる禮儀作法を、經驗ある老母より受け入れねばならぬ。

諸姑伯叔。猶子比兒。

諸姑伯叔。猶子は兒に比らふ。

姑とは、父の姉妹を謂ふ。伯叔は、伯父、叔父。伯母、叔母。共に男子の方ををぢ、即ち伯父とも叔父とも稱し。女子の方ををば、即ち伯母とも叔母とも稱する。兄弟の順を伯、仲、叔、季と云ふ。故に父母の兄ならば伯父。父母の弟ならば叔父。女子も之に準ず。此處の意は、前句に於いて婦は「入つて母儀を奉ず」と曰つたが、母ばかりではない。若し兩親の諸姑や伯叔などがあるならば、前同様之れに従ひ、其の補導をも仰げとの意。又猶子として、父母の兄弟の子あらば、猶ほ吾が子の如くに愛撫せよ。一家を和睦ならしむるには、吾が子だ、をぢの子だ、をばの子だ、などと別け隔てをなしてはならぬ。「禮記」檀弓上篇に、

兄弟之子猶子也。

とある。兄弟の子と云へば、男子ならば甥をいと云ひ、女子ならば姪をいと云ふ。吾が子同然に取扱へとの意。

孔懷兄弟。同氣連枝。

孔はなはだ兄弟を懐ひ。同氣を枝をつらを連ぬ。

前々句家庭の道德論から敷衍したので、遂に兄弟間に及び、人倫の道を全うすべきを述ぶるのである。孔は甚だ。兄弟は同一の父母より出生する。恰も一木の生氣を同じうし、上下の枝を連ぬるが如し。一の枝が長兄ならば、次の枝は第二兄、即ち長兄の弟である。故に互に懐ひ合ひ、兄は弟を愛して痛はり、弟は兄を敬して親しむ。是れ人類が、他の禽獸動物などと異なる所以である。然るに若しも連枝にして、相ひ争ひ鬩まぐようでは、萬物の靈長とは稱せられない。

交友投分。切磨箴規。

友ともに交まじるには分ぶんに投なじ。切磨せつま箴しん規きせよ。

君臣、父子、夫婦、兄弟、朋友と云ふ、五倫の順序として、遂に此に至る。其の朋友に交はるには、分に投ずとて、身分を考へて、吾身の身分相應に交際せねばならぬ。富豪の友だとして、富なき自分が、富豪のまねをして交はるには及ばない。交際は道徳上、學問上と云ふ如き、精神的の者でなくてはならぬ。「唐詩選」にある所の、

貧交行

杜甫

翻ヒルガヘセバツ手作トリ雲覆トクツガヘセバツ手雨フシ紛紛フシフシ輕薄レウボク何須ナニニシム數スウ君不見キミミヤハス管鮑クワンボウ貧時ヒシ交マツ

此道今人棄如土。

題長安主人壁

張謂

世人結交須黃金。黃金不多交不深。縱令然諾暫相許。

終是悠悠行路心。

右様の如き黄金の交りでは宜しからず。何處までも齊の管仲、鮑叔の如き純眞の交りでなくてはならぬ。故に分投すと云ふ。之を或書では、「友に交はるに分を投ずとて、氣分を投じて真心を盡せ」と解してあれど、宜しからず。

斯く清き交際を爲して、互に切磋琢磨して智を磨き、戒め正して過失のないように、

日進月歩の、學を修め徳を積まねばならぬ。時に「管鮑貧時の交り」とは、どんな交りであつたか、知つてをく必要があらう。依

つて略述しよう。

〔列子〕卷六力命篇に、

管仲嘗歎曰、吾少窮困時、嘗與鮑叔買分財多自與。鮑叔不以我爲貧。知我貧也。吾嘗爲鮑叔謀事。而大窮困。鮑叔不以我爲愚。知時有利不利也。吾嘗三仕三見逐於君。鮑叔

不以我爲不肖。知我不遭時也。吾嘗三戰三北。鮑叔不以我爲怯。知我有老母也。公子糾敗、召忽死之。吾幽囚受辱。鮑叔不以我爲無恥。知我不羞小節而恥名不顯於天下也。生我者父母。知我者鮑叔也。此世稱管鮑善交者。とある。

管仲と鮑叔とは、同郷の友達。而して管仲の方は、特に貧困の身であつたから、「貧時の交」と曰ふのである。○賈とは商ひする事。自與とは、管仲の方が自ら利を多く取る事。不肖とは、愚か。

北は敗北とて、逃ぐる事。怯は卑怯とて、恐れひるむ事。召忽は、管仲と共に公子糾に仕へたる臣。幽囚は、暗き所へ捕はれの身と爲る事。切磋については「詩經」の衛風淇奥篇に、

瞻彼淇奥、綠竹猗猗。有匪君子、如切如磋。如琢如磨。瑟兮侗兮、赫兮咺兮。有匪君子、終不可諼。とある。

彼の淇水と云ふ河の隈を見れば、緑色の美竹が、猗猗と柔にして美し。其れの如く此の斐然として章を爲す君子が居る。學を修むるには、角細工とて、角を切つて磋き上ぐるが如し、徳を修むるには、玉細工とて、璞を琢いて粗礫を除去し、其の後の玉を磨き上ぐるが如く、斯くて瑟たりと嚴かに、侗たりと寛大に。赫たり喧たりと威儀嚴正。斯かる文ある君子がある。到底其の人は慕はしくして忘るる事は出来ないとの意。本文の切磨は、此處から材を取つたのである。箴は竹針である。太古は砭とて石針。次は箴の竹針。又次に鍼の金針と爲つたので、皆其の時代時代で病を治療した鍼である。規は規矩の前半で、方圓の器を造るには、缺ぐ事の出来ない文廻はし。矩は曲尺である。依つて以て學業を進め、道德を磨き戒しめて、互に勵み合ひ助け合ふ事を述ぶるのである。

仁慈隱惻。造次不離。

仁慈隱惻。造次も離れず。

徳が磨かれたならば、仁慈博愛にして、人を恵み世を救ひ、以て惻隱とて物を痛み憐む心を一段と押し進め、且つ造次とて、僅かの間にも此の仁道を離れず。家に在つては慈悲深き好好爺と爲り、出でて仕へば、民衆を救済する所の仁政を行はねばならぬ。之が古の堯や舜の實踐し來たつた模範的なる聖帝行であつた。

隱惻については「孟子」公孫丑上篇に、

惻隱之心、仁之端也。羞惡之心、義之端也。

辭讓之心、禮之端也。是非之心、智之端也。

とある。惻隱とは、心を傷め痛むる貌。羞惡は、惡事を恥ぢ憎む事。辭讓は辭退し讓り與ふ。是非は、事物の善惡を見分くる意。端なりとは、緒なりとて、此の惻隱と云ふ心の緒から、遂に本當の仁徳が現はれ出づるとの意。今は其れを隱惻と、逆に綴つたのである。

次に造次とは、「論語」里仁篇に、

君子去仁、惡乎成名。君子無終食之間違仁。造次必於是、

顛沛必於是。とある。

朱註に云く、「終食とは一飯の頃。造次は急遽苟且の時。顛沛は、傾覆流離の際」と。

今少し簡易に解すれば、造次とは、造は到り、次は宿るとして、短時間の形容。顛沛は物が轉覆する間の短い時間を謂ふ。共に僅かの時間の形容語である。又君子たる者は「仁を去つて惡んか名を成さん」として、仁徳を去り離れては、名を成す所は無いとの意。故に又「孟子」告子上篇に、

孟子曰、仁人心也。義人路也。舍其路而弗由。放其心而不

知求、哀哉。

とある。

節義廉退。顛沛匪虧。

節義廉退。顛沛も虧げざれ。

仁慈博愛の次には、節義を將ち來たる。自然の徑路である。節義とは、操正しき道と云ふ事。廉退とは、素直にして貪らず。謙退して誇らず。極めて奥ゆかしき態度を謂ふ。而して前述の顛沛即ち物の轉覆する瞬間にも、此の節義や廉退の缺失なきようにせよとの意。匪は不に同じ。又非にも通ず。例に依つて同字を用ひないのである。

性靜情逸。心動神疲。

性靜なれば情逸く。心動けば神疲る。

斯くて心内にある性が靜に落ち著いてゐれば、外に向つて現はる情は安く楽しくなる。之に反して外に向つての心使ひが動搖すれば、心内の精神が自ら疲れて壽命を縮

ひる。性とは、心と生との合字。情は心と青との合字。是等を會意の文字と云ふ。即ち生れた時より所有せる心が性で、其の性が環境に觸れて色附くのを情と云ふ。青色の始まりである。春と爲れば樹木の芽が出て青くなり、夏には少し濃綠色と爲り、斯くて秋には、或は銀杏の如く黄色に變じ、或は又楓の如く赤色に爲るあり。而して終りには又稍や黒色を帶んで塵と化する。故に五色を青黄赤白黒と云ふのも、自然色の變化を順序的に云つた者のようである。心は總稱語で、其の心の根本や活動状態を性とも情とも神とも稱する。精神とは、心の活動が餘りにも不思議であるから、精しく且つ神の如くと形容したのである。逸は逸脱として、物から抜け出でて、こたはらざる意。

守^レ眞志滿。逐^レ物意移。

眞を守れば志滿ち。物を逐へば意移る。

皆前句を受けての敷演ゆゑ、眞を守ると云ふのも、眞心を取り守る意で、邪心を挾ま

ず。慾念を起さず。純眞の心を守つて取り失ひさへせずば、志が滿つるとして、即ち心が落ち着いて、満足を感じず。之に反して心が外界の物質を逐ひ貪れば、心意が轉轉に移り變つて、或は泣くような事になり、或は恨むような事に爲り、少しも落ち著きが出来ずして、遂には煩悶懊惱を來たして、心を疲勞し、人生の目的を達成する事が出来なくなる。佛教には此處を詳細に説いてある。圖示せば、



六塵とは、六種の塵として、外界の物質。六根とは、六識が依つて働く所の物質。六識

とは、所謂六種の神経を謂ふ。便ち中間の六根により、六境の物質を媒介して取り入れ、而して之を判断する者が六識である。而して此の六根六識が、外界の六塵に迷ひて捕はるるを凡夫と稱し、捕はれざるを聖者と稱す。捕はるれば心の煩悶と爲る。之を煩惱と稱し、捕はれられずして遠離せば、心に煩悶を起さない。其の煩悶なき心を菩提心即ち道心と稱するのである。塵とは、菩提の心を汚すゆゑ、然か名づく。法とは、色、聲、香、味、觸、五塵以外の一切の物質を網羅した所の總稱語である。普通に之を一切萬法と稱して、此の範圍を逸出する者は、一物も半物もない。故に之れに對して交渉する中介物を意根と稱し、内界では意識と稱する。意は心の働きの全體である。故に意を心馳せと訓する。心の外に在る者ではない。唯だ心の換名である。

其處で本文に、「物を逐へば意移る」と云ふ。即ち六根六識が、外界の六塵と交渉纏綿せば、之を逐物と云ふのである。意は轉轉たるを以て、心をコロコロ轉び廻はると

も解する。是を於いてか此の心意を一處に安定せしむる必要が生ずる。此の必要よりして坐禪の禪定と云ふ事が尊重せらるるのである。儒教の孟子すら次の如く言へり。

〔孟子〕告子上篇、

人有雞犬放則知求之。有放心而不知求。學問之道無他。

求其放心而已矣。

と。放心とは、物を逐ふ心の謂ひ。

堅持雅操。好爵自縻。

堅く雅操を持せば。好爵自ら縻はる。

堅固に高雅なる節操を持てば、善き高爵など、自ら身に縻はり來たる。好爵の二字を以て、位記、勳等、五爵など、總ての官位を網羅して言ふのである。五爵とは、公、侯、伯、子、男、五等の爵位。縻は纏に同じ。身に卷かり著く意。

以上にて平聲支韻の分が一段落を告ぐる。即ち「樂殊貴賤」より第二句目の、卑、隨、儀、兒、枝、規、離、虧、疲、移、糜の十字は、皆四支の韻字である。

次句「都邑華夏」の次の句京より以下、「巖岫杳冥」に至る六十句は、平聲庚韻と青韻とである。始まりが平聲陽韻、其の次が去聲の敬韻。又其の次が平聲支韻。而して其の次が普通ならば仄韻であるべき處に、平聲庚韻である。併し又其の次が入聲の仄韻であるから、差支へない事に爲る。原則としては、平韻、仄韻。平韻、仄韻と綴る。之を「逐解換韻格」の詩と曰ふ。仄韻に始まれば亦同様、仄韻、平韻、仄韻、平韻と綴る。尤も仄韻の中には、上聲。去聲、入聲の三韻があるから、仄韻の上聲や去聲などから、入聲に轉じても宜し。入聲から言ふも亦同じ。

都邑華夏。東西二京。

都邑華夏。東西二京。

好爵の者が出仕する處と云へば、此の天子の住まはせ給ふ所の都會や大邑で、國は又華夏と稱する。即ち中華とも中國とも。抑も何故然か言ふかなれば、華は文華。夏は又一年中一番物の盛に繁殖する時ゆゑ、周圍の夷狄に區別して、斯く繁華なる國と稱するのである。

東西二京とは、北部支那の大都會で、即ち黄河の沿岸にある長安と洛陽とで、上流に沿ひたる長安を西京と稱し、中間に位置する洛陽を東京と稱する。京とは大なる義、之は長い間の名稱であつた。今日では北京が北京だし、而して南部支那の揚子江沿岸地にある南京が文字通りの都である。千字文原作者魏の鍾繇の時には、只だ此の東西二京のみで、他はない。後世魏の次に晉の代と爲り、又其の晉が東晉と爲つた時代に今の南京が出来たのである。元は建業と云ふ名であつた。北京も亦其後の發展である。

背邛面洛。浮渭據涇。

邙を背にし洛に面し。渭に浮び涇に據る。

洛陽の都は、背後に邙山があり、前面に黄河の支流洛水と云ふ河がある。總て山ならば南を陽と稱し、河ならば其の北を陽と稱する。抑も邙山とは如何なる山かと回顧するに、之は昔から久しい間の土葬墓地の山である。東京では青山、京都では烏部山と云つたような墓地。併し青山は一種の平野。烏部山は規模狭小。少なくとも長崎市の皓臺寺の裏山當りの墓地が、此の邙山に比すべきかと思はる。可なり高く且つ廣大であるから。又此の邙山については、古來有名なる吟詠がある。彼の「唐詩選」の中に

邙

山

唐

沈佺期

北邙山上列墳塋。萬古千秋對洛城。城中日夕歌鐘起。山上唯聞松柏聲。

略解すると、此の北邙山の上には、墓場が澤山列なつてゐる。而も千年も萬年も昔より、此の洛陽城に對して屹立してゐる。すると洛陽城の方では、夕陽將に西山に沒せ

んとする頃より、徐徐と歡樂境を現出して、器樂や聲樂などが始まつて中中に賑か。之に反して此の北邙山を仰ぎ見れば、唯だ寂寂寥寥として、松や柏樹が風に吹かれて蕭々と一段の物淋しさを催ふしてゐるのみ。人一たび此の墓場を思ふとき、歡樂境の酒色に耽溺されようか否やとの、警省の意が含有せられてゐるのである。○墳塋とは墓場。洛城とは、洛陽の都の事で、都と云つても皆此の城廓内に、市民と共に存在してゐるのである。彼の地の城は、日本内地の規模とは、頗る其の趣を異にしてゐる。次に渭涇は共に河の名。之は西の京長安城の北を流れてゐる河である。而して渭水の方は常に濁り、涇水は澄めりと云ふ。長安の宮殿が、此の二水に沿うて建てられてゐるから、然か言ふので、浮御堂もあらうし、據り掛けた御殿もあらう。

宮殿盤鬱。樓觀飛驚。

宮殿盤鬱し。樓觀飛驚す。

盤とは繞るとして、横に廣がる貌。飛は高く上に峙つ貌。天子の宮殿が、或は横に列なり廣がつて、鬱々と盛んである。又樓の高殿や、寺觀などが、人目を驚かす程高く峙つて、四方の檐などは、鳥の飛ぶが如きかと疑はるる。寺は佛寺で、觀は道教の宮を謂ふ。

圖寫禽獸。畫綏仙靈。

禽獸を圖寫し。仙靈を畫綏す。

前句は宮城の外觀を述べ、此の句は内部の裝飾を述ぶるのである。麒麟、鳳凰、龜龍など、あらゆる動物の繪を、板や障子に描き、又人物では、仙人だの靈佛だの、種々なる尊崇すべき物を描き色採つて、絢爛眼を奪ふ。我國で云へば日光の各種建造物の如く、是れ等を縦觀せば、此の二句の實物を觀るに均しかるべし。

丙舍傍啓。甲帳對楹。

丙舍傍に啓け。甲帳楹に對す。

是れからは宮殿附屬の物に及ぶ。丙舍は炳然たる舎で、天子宮殿内の局。明かに綺麗な宿舎が、兩門の傍に啓けて立ち、此れよりして正殿に通ずと云ふ。次に甲帳として、高價な第一に價ひする如き戸張が楹に對して向ふ側に見ゆる。綏子の帳に、鳳凰や蛟龍などの刺繡のある者ならば、無論甲帳の第一等であらう。楹は柱併し甲乙は帳名。殿の兩楹の間に在りと云ふ。

肆筵設席。鼓瑟吹笙。

筵を肆ね席を設け。瑟を鼓し笙を吹く。

天子筵席を設け、諸侯を殿上に會し、其れより宴會を始むるのである。石磴の上に筵

を敷き肆ね、其の上に各官の席を設けて、音楽を始む。或は琴瑟を鼓するあり、或は笙や篳篥などを吹き鳴らしなどして賑ふ。

彼の國人は、革靴や絹靴や綿靴などを常に使用してゐる故、多くは跽とて、四角形な切石を斜に、角と角とを接する如くに敷き詰めてある。我國禪門の佛殿や、御開山堂などの屋内は、大概此の支那式の跽である。又縦ひ疊の上でも、此の石跽上に使用する如き敷き胡座を使用し、其の他一般參集の僧侶が、各座具と云ふ者を左手に掛けて御拜の時之を敷いて伏し拜む。彼の國の筵を敷くに同じ形式を行ふのである。

升階 納陛。弁轉疑星。

階に升り陛に納り。弁轉じて星かと疑はる。

或は階段を升りて堂に入り、或は又陛を升つて堂に通ずる、天子の階を陛と稱す。納も入るに同じ。是れ亦同字を避くる爲に、此の如き字を使用せり。而して諸侯や大官

が、天子の御召しに従ひ、東階より上る者は、先づ右足を擧げ、西階より上る者は、先づ左足を擧ぐ。斯くて御殿に昇つて行動すると、弁冠と云ふ鹿皮を以て造つた冠りに、玉が飾り附けてある。其れが冠の動く毎に光つて星の如くに見ゆとの事。「詩經」の衛風淇奥篇に、

有匪君子。充耳琇瑩。會弁如星。

とある。匪たる君子は、前出の如く、文徳の斐然たる君子。充耳は耳を塞ぐ玉。琇瑩は美しき石。即ち耳を蔽ふ所の飾り。會は縫ふ。弁は皮製の冠。而して玉を以て、皮弁を縫ひたる縫目の處に附け飾つた者。明なること星の如しとある。我が軍將の冑の鉢の筋合ひに、澤山な疣の如き星あるに同じ。

右通廣内。左達承明。

右は廣内に通じ。左は承明に達す。

正殿の右の方は廣内殿として天子の内庭、又は大内と稱す。此處に通じ、左の方は承明殿として、天子の大殿に達す。即ち宮庭内の左右に列峙する御殿の大略を述ぶるのである。

既集墳典。亦聚群英。

既に墳典を集め。亦群英を聚む。

又殿中には講學の爲、三墳、五典等の古書を集め、又群れる多くの英でた學者を聚めて講讀せしむる。所謂侍講とか侍讀とか稱する者が其れである。三墳五典とは、

〔書經〕即ち古文尙書の序の中に、次の如く出づ。

伏羲、神農、黃帝之書、謂云三墳。言大道也。註、墳、少昊、顓頊、高辛、唐(堯)虞(舜)之書、謂之五典。言常道也。

とある。又續いて、「春秋左氏傳」

曰、昭公十一年。楚左史倚相、能讀三墳、五典、八索、九丘。即謂上世

帝王遺書也。

とある。

註、八卦之說、謂之八索。九州之志、謂之九丘。丘聚也。言九州之事皆聚此書也。

杜彙鍾隸。漆書壁經。

杜彙鍾隸。漆書壁經。

杜は杜操として、字は伯度、名は慶。後漢時代齊の丞相である。草書を能くしたりと云ふ。彙とは草書の事。次に鍾とは、魏の大尉鍾繇、字は元常、皓の曾孫である。武帝に仕へて武亭侯に封ぜらる。特に行書を以て名を著はす。又小篆の書を改めて隸書と爲したとも云ふ。何れ隸書をも能くしたるを以て、斯く鍾隸と綴つのであらう。

次に漆書とは、漢の武帝の時、魯の恭王が、孔子の舊宅を壞ちたる時、壁中より石函

が出た。見れば書經や論語や孝經などが入つてゐた。皆科斗文字とて、蝌蚪に似た古文で、漆を以て竹簡に書いてあつたのである。之を壁書と云ふ。壁間から出た書なるを以て。抑も如何なる字かと云へば、次の如き者である。

𠄎(惟)。豸(亥)。𠄎(年)。申(周)。𠄎(尊)。𠄎(子)。𠄎(萬)。

☉(日)。𠄎(水)。

是の如き象形文字である。之を古文と稱す。文字の始まりである。

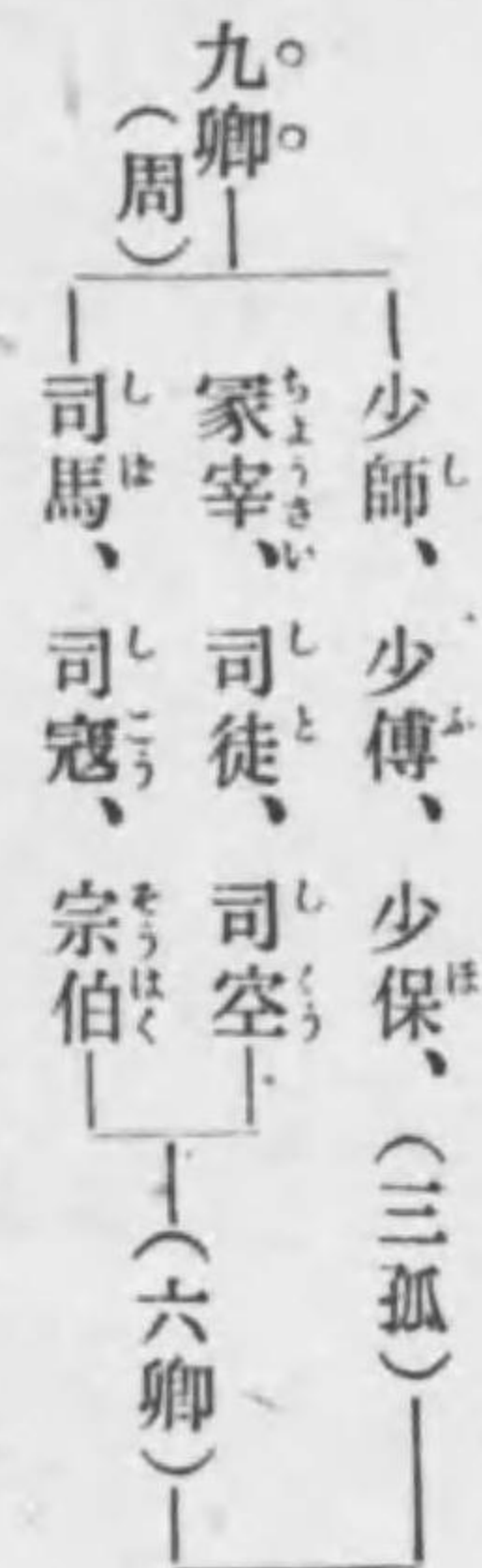
又漢の靈帝が詔して、嵩山の石壁に、漆にて六經を書せしめたと云ひ傳ふ。併し六經全部ではあるまい。六經とは、詩經、書經、易經、春秋、禮記、樂記。併し樂記は滅亡したから、周禮を其の代はりに加ふと云ふ。之は前句の「墳典を集む」と云ふに應じた句である。周禮を「しゅらい」と讀む。之が昔の讀方である。

府羅將相。路俠槐卿。

府には將相を羅ね。路は槐卿を俠む。

朝廷の役所には、武官の將軍や、文官の宰相などの邸宅を羅ねて、文武方面に遺算なく、又宮殿に通ずる道路は、三公九卿等の大官連の邸を挾んでゐる。昔の城廓で言ふならば、二の丸とか三の丸などには、やはり城中出仕の大官屋敷が列を爲してゐた者である。羅は羅列とて連なる。俠は挾に通ず。彼の國の人は、得て文字の變つた字を使用する癖がある。學ぶべきではない。寧ろ矯正すべきである。槐については、「周禮」に「面三槐三公位焉」とある。周の代朝廷内、道の兩邊に植ゑたる槐の木に面して大官の三公が坐せしより、轉じて三公の位階の義と爲つて、三公九卿などを槐卿と稱するに至つた。而して又周禮の註に、「槐の言は懷なり。遠人を此に懷け來たして之れを謀らんと欲するなり」とある。故に又三公の事を槐門とも言ふ。槐は材質堅くして、木理細き喬木。エンジュと稱するが、或は苑樹か。但し言海には古名にすの轉訛と解せり。又槐庭とて、三公の庭に三本の槐を植ゑたるより、三公の異稱と爲れ

りと云ふ。三公とは、周にては、太師、太傅、太保。漢にては、大司徒、大司空、大司馬、唐にては、太尉。司徒。司空。我國にては、太政大臣、左大臣、右大臣。八卿とは、我國では、中務、式部、治部、民部、兵部、刑部、大藏、宮内。以上八省の長官を謂ふ。彼國では三公九卿と云ふ。我國では三公八卿。



又後世には、朝中に九寺あり。各一卿あり。之を九卿とも稱す。

- 太常寺、司農寺、大理寺、
- 光祿寺、宗正寺、大府寺、
- 大僕寺、鴻臚寺、衛尉寺、

戸封_二八縣_一。家給_二千兵_一。

戸は八縣に封じ。家には千兵を給ふ。

次に功臣などをば諸侯に封じ、又其れ其れの兵權を與ふ所の一例を述ぶるのである。戸とは民家の戸數で、功臣ある者を封じて、八縣に涉れる大邑を頒ち與ふ。所謂萬戶侯などの語のある所以である。其れ等の家より取り立つる所の租税を私有せしむる。又千兵を給すとは、封ぜられて大名や小名とも爲れば、護衛などの兵を要する。故に千人の兵を與へて之を司らしめ、以て國の固めの一材料とも爲すのである。我國では大官に「隨身兵仗」を賜ふと云ふ事がある。同じ意味の者である。

高冠陪_レ輦。驅_レ轂振_レ纓。

高冠輦に陪し。轂を驅り纓を振ふ。

斯くて高位の大官連は、天子の御車に陪つて、行幸などの御伴を爲し、又は自ら乗れる馬車を驅り馳せ、或は冠の紐を風に振り動かして、天子の御出入に随伴する。昔の杼冠や、現代の絹帽などは、可なりの高冠である。天子の冠は高さ七寸と云ふ。輦は手車として、幾人かの手にて輿を奉持する。轂は車の心棒として、車を指す。纓は冠の紐。二句共に大官侍臣の有様を述べたのである。

世祿侈富。車駕肥輕。

世祿侈り富み。車駕肥えて輕し。

其處で大官どもも、世襲財産、世襲官位である爲に、富益々増加して、奢侈富豪と爲り、従つて車駕として、馬に曳かす乗物に乗つて、肥馬輕裘。馬は肥え太り、自分の著る衣裳は、輕い爲に舉動に便利である。冬は狐裘を著し、夏は輕き麻布の衣裳を用ふる。故に其の一方を舉げて、押韻したのである。

〔論語〕 公冶長篇に、

子路曰、願車馬、衣輕裘、與朋友共、敝之而無憾。

と。此の輕裘とは、輕は夏の薄絹。裘は冬の皮衣の事である。敝は壞るなり。

又同雍也篇にも、

子曰、赤之適齊也、乘肥馬、衣輕裘。吾聞之也、君子周急

不繼富と。

赤とは、孔子の門人、公西赤の事。急は窮迫として、貧なるを謂ふ。一説には、本文の肥輕を、「肥馬が輕く走るなり」と解してゐるが、宜しからず。

策功茂實。勒碑刻銘。

策功茂實。碑に勒し銘を刻む。

策功とは、種々に策略を逞くして功を建てたるを謂ふ。策は計ると解する。茂實は、

其の功勳が茂り盛んに充實してゐるを謂ふ。故に其等の功勳を、或は石碑や銅碑に、文章と銘とを作つて刻み込むのである。勒と刻とは同意義、きざむと訓す。銘は名と金との合字。會意の文字にして、又諧聲を兼ねたる者。即ち金石に其の人の名譽や功績を記入する意味の字。故に金石への刻文を銘と云ふ。墓碑に記すを墓碑銘と云ひ、旗に死者の名を記すを銘旗などと云ふ。又心に刻み込んで忘れざるを、銘心鏤骨とか、銘肝などと云ふ。鏤はちりばむとて、刻や銘と同じく、鑿り込む意。

礪溪伊尹。佐時阿衡。

礪溪伊尹。時を佐けし阿衡。

其の「勒碑刻銘」についても、古來最も有名なる者は、周の武王の軍師として、暴君紂王を滅した太公望や、又殷の湯王の大官として、是れ亦暴君桀王を滅した伊尹の如きが其れである。礪溪は、太公望の釣りせし處と云ふ。二大官とも、時の名君を佐け

て天下を安定せしめたるゆゑ、伊尹をば阿衡と稱せられた。名譽を意味した官名である。阿は倚なり、衡は平なり。天下人民が、倚りて以て平かになる所の意。

〔尙書〕太甲上篇に、

惟嗣王。不惠乎阿衡。

註、阿、倚。衡、平。言不順伊尹之訓。

併し筆者の一考する所では、阿は親む意味の接頭語である。即ち兄を阿兄、弟を阿弟、御父を阿爺、主君を阿主、叔父を阿叔などと云ふ。皆敬ひ親しむ詞と爲つてゐる。衡ははかりの棹。故に横と訓す。即ち物の平衡を取る者であるから。伊尹に依つて天下の衡平を得たるを以て、時の史官が、伊尹を阿衡と太甲篇に書いたのであらう。故に阿兄と書いて、之をおあにい様と訓す。何れ平素より湯王からも、阿衡と呼ばれてゐたのであらう。太公望の名にしても同様で、彼れの氏名は呂尙である。然るを文王が始めて逢つた時、「吾が太公、氏を望む事久し」と云つたとかにて、爾來斯く太公望と

云ふ尊稱語を戴いたわけである。伊尹と云ふのも殆ど同義で、之れも「呂氏春秋」に伊尹名摯。則尹非名也。蓋湯得之、使尹正天下。故號曰伊尹とある。

尹は正すと訓する。解説が頗るくどいけれども、是等皆學問と云ふ者である。

奄宅曲阜。微旦孰營。

奄いに曲阜に宅す。旦微つせば孰か營まん。

其處で太公望や伊尹に次いで著名なりしは、周公名は旦其の人である。奄は大なり。宅は居宅なり。曲阜と云ふは、魯國の地名。周公旦が封ぜられた所である。而して周公の子伯禽と云ふ者が、此の魯國の始祖と爲つた諸侯である。然るに此の有名なる旦の周公が、若し此の代に出でずんば、誰が周の成王を輔導して天下の泰平を致し、而して此の曲阜を開いて魯國を創始する者があらうかと。伊尹や太公望の如き名士に續

いて、此の周公を引出し來たつたのである。周公は周の文王の子にして、武王の弟である。武王の子成王を輔導して、支那歴史中無二の良政を爲した名宰相であつた。

桓公匡合。濟弱扶傾。

桓公匡合し。弱きを濟ひ傾けるを扶く。

自然と古よりの歴史を辿つて、周の盛時を過ぎて、春秋の世に及んだのである。周の天子はあれでも振はず。五霸と云つて、五人の大名頭が、代はる代はる起つて天下を統治した。其の五霸の中、齊の桓公が最初であつたから、周公の次に出したのである。齊の桓公は、管仲と云ふ名宰相を得て國を治め、遂に諸侯を九合し、天下を一匡すと云つて、天下の諸侯を九回も會同せしめて盟約を結び、互に周の天子を尊重し、又亂りに干戈を交へざるやうにとの誓約を爲さしめて、天下の亂を静めた賢君であつた。匡は正だし、合は盟ひ合はす。此の春秋と云ふ世が、二百四十二年もあつたので

其の間五人の大名頭が、交互に成功して天下を治めたのである。我が國で之を比較せば、藤原氏や平氏などの文官的政治が終了して、源の頼朝が始めて軍將にして、天下の總追捕使と爲つて、我國を治めたのが、恰も此の桓公が覇者を始めたのと頗る酷似してゐる。爾來源氏の權は北條氏に移り、北條氏の權は足利氏に移り、足利氏の權は織田信長を経て豊臣氏に移り、又遂に徳川氏に歸して、明治維新に達するまでの約三百年間は純然たる封建制度で、天皇はあれども、兵馬の權は、徳川將軍家にあつたのである。其れと此の春秋二百四十餘年間の政治とは、頗る能く似てゐるのである。五霸とは、齊の桓公、晉の文公、秦の穆公、宋の襄王、楚の莊王の五伯である。此の間を詳細に記述したのが、春秋左氏傳と云ふ三十卷の書冊である。斯くて大名頭は、弱國を濟ひ、傾覆せんとする如き危き國をも助けて、四百餘州を大略善く治めたのである。桓公のみではない。五霸は、大體に於いて同様の經路を履行したのである。然るに桓公が最初であつたから、斯く綴つたのである。

綺廻ニ漢惠。説感武丁。

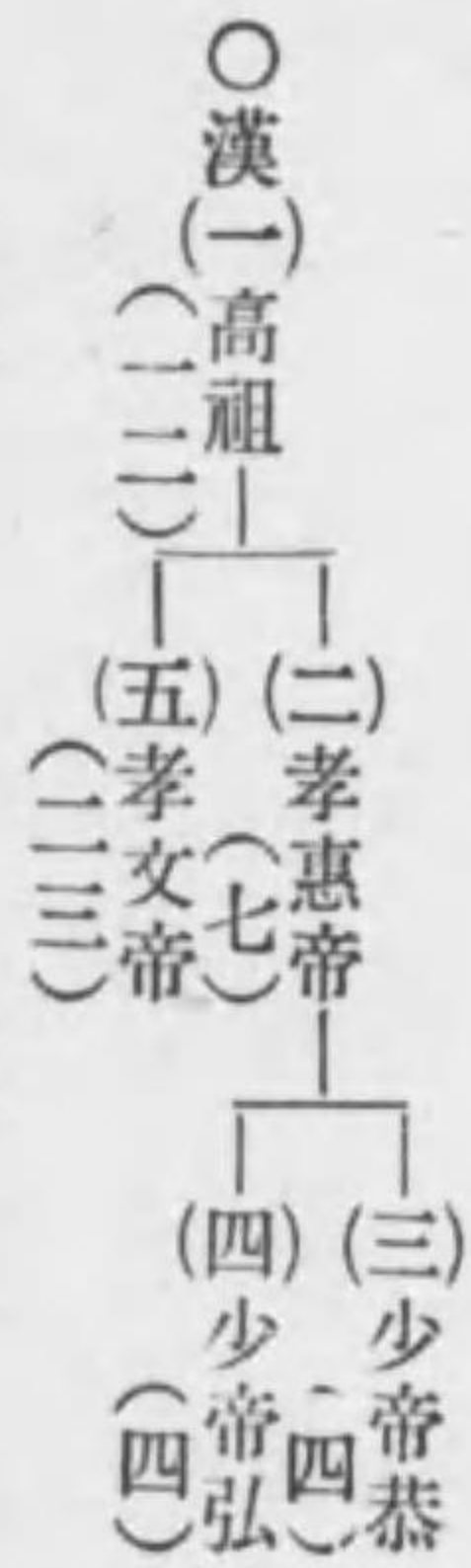
綺は漢惠を廻らし。説は武丁を感ず。

歴史は、春秋の次が戰國と爲り、其の末が秦と爲つて、例の萬里長城は、此の時代に築かれ、秦は僅か三代弱と云ふ如き、在位一年の王子嬰と云ふを以て終はり、漢の代と爲つたのである。

- (一) 秦始皇帝
- (二) 二世皇帝 (在位二年)
- (三) 三世王子嬰 (在位一年)

綺とは、綺里季とて、商山四皓と云ふ四老人名士中の一人である。秦の暴政の時、東園公、綺里季、夏黃公、角里先生と云ふ四人の老人が、秦の始皇の無道を恐れ、商山に隠れて出でず。秦滅んで漢の代と爲り、漢の高祖が、使を立てて聘したけれども至らず。其の後漢の皇室に、皇太子が廢せられて、妾姫の皇子が之に代はらんとする時

に、智謀の相張良の計らひにて、此の四老が商山を出でて、皇太子に隨ひ、高祖をして驚かしめ、爲に皇太子は元の如くに定まつて、後に天子と成つたのが、惠帝である。故に「綺は漢惠を廻らす」と云ふ。廻らすとは、元に廻らし歸す意。皓とは白しとて、白髮の老人を謂ふ。



説とは傳説とて、殷の高宗武丁を輔けて仁政を世に行つた賢宰相である。高宗が夢中に感じて、此人を土木工事の中より見出して重用した逸話に富む歴史である。

〔書經〕說命篇に、

高宗夢得説。使百工營求諸野。得諸傅巖。

註、使百官以高宗所夢之形象經營求之於外野得之於傅巖之巖。

歴史から言ふと、殷の伊尹、次が此の傳説、次が太公望、次が周公、次が桓公、次が惠帝と順序するけれども、文章の關係と、韻礎の關係とを以て、斯く前後し綴つたのであらう。是等が自然に文章と漢詩との別を爲す所以の一とも言ふ事が出来るのである。又夢に感じて傳説を得たと云ふ事は、我が後醍醐天皇が、笠置の行宮にて、楠正成に關する事を夢に見て正成を得たのと、亦頗る酷似してゐる。

俊又密勿。多士寔寧。

俊又密勿。多士寔寧。

俊は優れ、又は治むる、又賢才。密勿は、勉め勵む。「漢書」に、「密勿從事」とある。寔は誠に、寧は安し、前述の如く、四皓の名士と云ひ、傳説と云ひ、萬人に勝れた人物が勉め勵んで天下國家を治むる。而も是の如き士が澤山出でて、誠に天下は安寧である。「詩經」大雅文王篇に、

世之不顯。厥猶翼翼。思皇多士。生此王國。
 王國克生。維周之禎。濟濟多士。文王以寧。

猶は猷に同じ、謀。翼翼は勉め敬ふ貌。思は茲に、皇は大なり。王國は周。禎は柱又幹。濟濟は衆多の貌。

晉楚更霸。趙魏困橫。

晉楚更霸。趙魏橫に困しむ。

此處は句の構造法が、前の「綺廻漢惠」などと前後せる者の如し。歴史が餘りにも前後してゐる。因つて最後に予の考案を以て之を綴換て見よう。今は此の儘として。春秋の世、齊の桓公が大名頭と爲つてから勢力の消長に應じて覇者交々起り、即ち桓公の次には晉の文公が出でて覇者と爲り、其の後亦衰へて秦の穆公が覇者と爲り、次

には宋の襄王、又其の次には楚の莊王が覇者と爲る如く、交も出で、覇者と爲つて、天下を安定ならしめたのである。然るに春秋の世も二百四十二年許を経ると、覇者の勢力も亦衰へ、恰も我が足利十三代の末路の如く、將軍家が少しも振はない。依つて武田氏や上杉氏など出でて勢力を争ひ、織田氏出でて今川氏滅び、世は戰國と爲つたが、彼の國の歴史も、殆ど其の通り。

趙魏橫に困しむとは、北部支那、黄河を中心として連衡説が起つた。之は函谷關を境として、西は一時覇者たりし穆公の子孫の秦が勢力を増大して、將に關東の六國を兼併せんと謀略を廻らし、而して其の中最も著名なるは、趙儀と云ふ策士であつた。斯くて關西を横地と稱す。之に對向して函谷關の東を縦地と稱して、此の區域内には、齊、燕、楚、韓、魏、趙の六國がある。此の六國を縦に連合して同盟し、關西秦の横暴を撃破せんと企てたので、其の中亦最も著名なるは、蘇秦と云ふ論客であつた。之を戰國時代の合縱連衡と稱するのである。縦はたて、衡はよこ、連衡は、山西の秦が

進んで六國を東西の横に連ねて並吞せんと策動し、合縱は、山東の六國が南北の縦に連合して、秦の侵入を防禦せんと企畫したのである。然るに關西秦の昭王は中々の勢力家で、彼の函谷關に最も近き趙、魏などは、頗る其の横議の爲に困惑せられたのである。而して結局は、六國が次ぎ次ぎに秦より撃滅せられたのである。

假途滅虢。踐土會盟。

途を假つて虢を滅ぼし。踐土に會盟す。

是れ亦順序が歴史と異なつてゐる。此の二句の事は、共に戰國以前、即ち春秋時代の出來事である。晉の獻公が、虢を伐たんとして、其の通過の途を虞に假り、行いて虢を滅し、歸る時、其のついでを以て虞國をも滅したのである。甚だ不都合な仕方であつた。然るに獻公の子孫文公に至つて覇者と爲るや、天下の諸侯を踐土と云ふ鄭の地に會合せしめて、周の天子を敬ひ、各國互に自肅すべき事などの盟を爲したのであ

る。詳細は共に「春秋左氏傳」に出づ。僖公二年傳に、

晉荀息、請以屈産之乘、與垂棘之璧、假道於虞、以伐虢。自晉適於虞、故也。中略、虞公許之。且請先伐虢。而欲求婚。宮之奇諫不聽。遂起師。夏、晉里克、荀息、帥師會虞師、伐虢、滅下陽。也。邑。屈地。生良馬、垂棘出美玉、四馬曰乘。

僖公五年傳に、

秋、晉侯復假道於虞、以伐虢。宮之奇諫曰、虢、虞之表也。虢亡、虞必從之。晉不可啓。寇不可翫。晉一之謂甚。其可再乎。諺所謂輔車相依、唇亡齒寒者、其虞、虢之謂也。中略、弗聽。許晉使、宮之奇以其族行。去也。

八月午甲、晉侯圍上陽。虢國都也。冬十二月丙子朔、晉滅虢。虢公醜奔京師。師還、館于虞。

遂襲虞滅之、執虞公及其大夫井伯。

不信なること驚くべし。次に「踐土會盟」とは、僖公二十八年の經に、

五月癸丑、公會晉侯、齊侯、宋公、蔡侯、鄭伯、衛子、莒子、盟于踐土。
踐土、鄭地。公、魯侯也。

同二十八年傳に、

癸丑、王子虎盟諸侯于王庭。要言曰、皆獎王室、無相害也。
有渝此盟、明神殛之、俾墜其師、無克祚國、及而玄孫、無有
老幼。君子謂、是盟也信。謂晉。於是役也、能以德攻。
註、王子虎、周之卿士。王庭、踐土所造之王宮。獎、助也。經書癸丑、月十八日也。傳書癸亥、月二十八日。經傳必有誤。

何、遵、約、法。韓、弊、煩、刑。

何は約法に遵ひ。韓は煩刑に弊る。

漢の蕭何は、漢の高祖の重臣。高祖が秦を攻めて關中に入るに及び、獨り先づ秦の律令及び圖書を收めて之を藏す。其中漢の高祖帝位に即くや、法を三章に約して、秦法の煩雜なるを避けしめた。三章とは、一、人を殺す者は死罪。二、人を傷つくる者は罪に當つ。三、窃盜する者は罪すと。約は省約。

韓とは韓非とて、元と韓の諸公子である。刑名、法術の學を好む。韓王用ふること能はず。去つて秦に至る。秦王大に喜び、之を用ふ。然るに韓非餘り多くの法令や、苛酷の刑法を制定せし爲、民大に苦しみ、始皇の代には、罪人の往來、巷に滿ちたりと云ふ。斯く刑罰の法を煩雜ならしめたる爲に、却つて韓非は失敗して弊れたとの意。著書に「韓非子」二十卷あり。五十五篇、弊は、敗る、疲る、困しむなどの訓がある。

起翦頗牧。用軍最精。

起翦頗牧。軍を用ふることも最も精し。

白起、王翦、共に秦の將軍である。山東の六國を撃破したるも、多くは是等將軍の力である。頗牧とは、趙の良將で、廉頗と李牧とである。廉頗は、賢宰相の藺相如と、芻頭そくとうの交りを爲して、一時國を盛んならしめた。

此の四人の中、起、翦の二人は、秦の爲に關東を攻め、頗、牧二人は、秦よりの侵入を防ぎ、攻防位置を異にせりと雖ども、軍を用ふる戦事にかけては、共に皆精妙であつたとの事。

李牧について少し書いて見ると、

趙の將と爲り、代の雁門に居り匈奴に備ふ。匈奴入寇する毎に、避けて戦はざる者數歲。後匈奴と戦ひ、大に之を破る。功を以て武安君に封ぜらる。秦王之を患へて

反間を放つ。趙王、他將をして之に代らしむ。牧命を受けず。王之を殺す。秦遂に王翦をして趙を伐たしめ、大に之を破り、趙王を虜にす。

とある。彼國にて、名將が不幸を蒙つて枉死する事あるは、決して珍しくない。厭ふべき國風である。

宣威沙漠。馳譽丹青。

威を沙漠に宣べ。譽を丹青に馳す。

沙漠とは、北部支那が、戈壁沙漠に接近してゐる故、北匈奴などは、其の沙漠中にて例の包を造つて移動的に生活してゐるのである。然れども北方は嚴寒なる爲、筋肉が緊つて強健である。故に中國は常に其の脅威を蒙つてゐたのである。秦皇が萬里の長城を築いて、而も猶ほ將軍蒙恬をして六十萬の兵を率ゐて北方を守らしめたと云ふのも、亦其れが爲である。漢にありては、李廣利をして匈奴を伐たしむるなど、やはり

威勢を邊土の外まで示した事に爲る。唐の王昌齡作、從軍行の詩に、

秦時明月漢時關。萬里長征人未還。

但使龍城飛將在。不教胡馬度陰山。

此の飛將とは、漢の李廣將軍の事である。漢の昔では、是等の名將があつて威を沙漠に宣べたれども、今唐の時代には、斯かる名將ありや否やとの詩である。陰山は、漢と匈奴との間にある陰山山脈。譽を丹青に馳するとは、前漢宣帝の甘露三年に、功臣十一人の像を、麒麟閣の障子に圖畫せしめ、官爵姓名をも署したと云ふ。第一は大司馬大將軍博陸侯の霍光である。終りは典屬國の蘇武である。中には魏相や丙吉等もある。是等は丞相である。斯くて功臣の名譽を世に馳せ残さしむ。丹青とは、繪畫を謂ふ。

九州禹蹟。百郡秦并。

九州禹蹟。百郡秦并はす。

昔禹王、九年の洪水を治めて、天下を冀、兗、青、徐、楊、荆、豫、梁、雍の九州に大別して善く治めた。全く禹王の功蹟である。之が爲に禹は、舜よりの選拔を蒙つて王位に上つたのである。

其の禹の功績を存せし天下も、春秋を経て、戦國を経て、長い間の封建制度が、秦の始皇帝の爲に併合せられ、天下を分つて百郡と爲す。即ち齊、燕、楚、韓、魏、趙の山東の六國は、皆秦に歸一し終つて、郡縣制と爲つたのである。唐の杜牧が作れる阿房宮の賦に、

六王畢。四海一。蜀山兀。阿房出。

と綴つたのは、秦の始皇が天下を統一して、大宮殿を咸陽に作つたのを賦した最初の句である。蜀山の木が盡く切り盡されて兀山と成り、其の材木に依つて阿房宮が出来たとの事。當時の政治地理は、我國の縣の内に郡のあるとは異なつて、彼國のは、

郡の中に縣があるのである。元山とは剝げ山と云ふこと。

嶽宗恒岱。禪主云亭。

嶽は恆岱を宗とし。禪は云亭を主とす。

以上主として政治や軍事に關する優秀の人物を大略列記し來つたゆゑ、此句よりは、名山大川について、其の大略を述ぶるのである。

嶽は五嶽として、東は泰嶽。普通に魯の泰山と呼んでゐる。南は衡嶽。其の南を衡陽と云つて、著名の市街である。西は華嶽。北は恆嶽。中央は嵩嶽。達磨大師は、此の嵩山の麓なる少林寺にて、九年面壁を爲されたのである。今は其の全部を擧ぐる事が出來ないから、北方の恆山と、東方の泰山とを宗とすと述べたのである。宗とは頭との意。又泰を岱とも書く。「風俗通」に、東方泰山、尊曰岱宗。岱者長也。長とは五嶽の長たる意。有名な神が祀つてあるからである。又「五經通義」に、「泰山一名岱宗。」

王者受命易姓、報功告成。必於岱宗。東方萬物始交代之處也。」とある。

又「孟子」盡心上篇に、孟子曰、孔子登東山而小魯、登太山而小天下。故觀於海者難爲水、遊於聖人之門者難爲言。

註、東山、蓋魯城東之高山。而太山、則又高矣。○太通泰。

泰山は以上の如き事情あるを以て貴び、恆山は又北岱州に在つて南に向ふゆゑ、人君の南面するに喩へて宗とし貴ぶと云ふのである。次に禪とは封禪として、天子が始めて即位せらるゝや、東方の泰山に登つて即位の奉告を爲し、地を封じ盛り上げて天を祀る。禪は其れと同様に云云山、亭亭山として二個の小山がある。其の麓にて土地を平たくして地の神や山川の神などを祭り、亦即位の奉告を爲し、以て天神地祇其の他諸神の被護を蒙らんと欲する禮法を行ふのである。故に之を天子巡狩の祭りと云ふ。禪は禪讓として、先帝より讓位を受くるの意。故に禪に、讓る、又傳へ與ふなどの訓があ

る。「韻會」に云く、

築^{キツク}土^ツ曰^{ヒト}封^フ、除^{ノゾク}地^チ曰^フ禪^{チン}。古^コ者^ハ天^{テン}子^シ巡^ソ守^シ、至^シ於^ニ四^シ岳^{トク}。

則^ナ封^フ泰^{タイ}山^{サン}而^ニ祭^ス天^{テン}、禪^{チン}小^コ山^{サン}而^ニ祭^ス山^{サン}川^{ケン}。

とある。又「史記」封禪書に、

管仲^{カンチュウ}曰^ク、昔^ム無^ク懷^{クワイ}氏^シ、封^フ泰^{タイ}山^{サン}、禪^{チン}云^ク云^ク。

註、云。云山名。在梁父東。案隱云、云云山、在蒙陰縣故城東北。下有云云亭。

○案、伏羲、神農、炎帝、顓頊、帝嚳、堯、舜、湯、皆禪云云。

又同書、黃帝封^フ泰^{タイ}山^{サン}、禪^{チン}亭^{テイ}亭^{テイ}。○「風俗通」云、三皇禪^{チン}于^ニ繹^{シク}繹^{シク}、五帝禪^{チン}于^ニ亭^{テイ}亭^{テイ}。

「括地志」云、亭亭山名、在^ニ泰^{タイ}山下^ノ。

雁門紫塞。雞田赤城。

雁門紫塞^{ガンモンシサイ}。雞田赤城^{ケイテンセキジョウ}。

雁門關^{ガンモンカン}とて、河北省太原の北、又は五臺山の西北にある所の、萬里長城中の關門である。紫塞は萬里の長城である。周弘正の雁の詩に、

南思^{ナンシ}洞庭^{テイテイ}水^{スイ}。北想^{ホクキョウ}雁門^{ガンモン}關^{カン}。稻梁^{ダウリョウ}俱^ニ可^シ戀^シ。飛^ヒ去^リ復^シ飛^リ還^ル。

又「山海經」に、雁門之山無^シ草木^{ソク}。注、雁門山、即北陸西陰。雁之所^ニ出^ル。因^テ以^テ名^ス。

註、西陰、地名。雁來往向此缺中過。人號曰雁門山。

然れば雁門の山に設けたる關所ゆゑ、雁門關と云ふのであらう。箱根の關と云ふも同じ事。紫塞については、「古今注」に、

秦^シ築^ク長^{チヤウ}城^{テイ}。土^ツ色^{シキ}紫^シ。漢^{カン}塞^{サイ}亦^モ然^リ。一^ニ云^ク雁門^{ガンモン}草^{ソウ}生^シ其^ノ色^{シキ}皆^ニ紫^シ。

故^コ名^ナ紫^シ塞^{サイ}。又鮑昭^{ボウシウ}燕^{エン}城^{テイ}賦^ヒに、

南^{ナン}馳^チ蒼^{ソウ}梧^ク漲^{チヤウ}海^{カイ}。北^{ホク}走^{ソウ}紫^シ塞^{サイ}雁^{ガン}門^{モン}。

などとある。畢竟北方著名の地。

又雞田は、「舊唐書」地理志に、雞田州在^ニ廻^{クワイ}樂^{ラク}縣^{ケン}界^ノ。突厥^{トクトク}九^ク姓^{シヤウ}所^ノ處^ニ。又陳暄^{チンシュン}雨^ウ雪^{セツ}の曲

に、

都尉出祁連突厥、匈奴三種雨雪滿雞田雞田、澤名

祁連山も北地。然れば此の雞田も北方の地。祁連は天山の事である。赤城は、「會稽記」に、

赤城山名。色皆赤。狀似雲霞。赤城山、天臺之南門也。

之は北方の紫塞に對して、南方の山赤城を以て對を取つた者であらう。一方は紫、一方は赤。會稽、天臺、共に支那の東南部に屬する。

昆池碣石。鉅野洞庭。

昆池碣石。鉅野洞庭。

之は西方及び北方の名所。昆池は池の名。具には昆明池。長安の西に在り。「漢書」西南夷傳に、

昆明國有池。方二百里。武帝欲伐昆明、作池象之、以習水戰。碣石は山の名。「漢書」地理志に、
夾右碣石注碣石海邊山名也。言禹夾行此山之右、而入于河、逆下也。と。

〔書經〕禹貢篇には、

夾右碣石、入于河。

註、碣石海畔山。禹夾行此山之右、而入河逆上。○夾、音協、帶也。碣、其列文、音桀。河、黃河。

鉅野は只だ大野とある。或は鉅鹿郡の野とも言ふ、魏の地に屬す。やはり地名である。武藏野などと云ふに同じ。「漢書」高帝記に、

田榮殺田市、自立爲齊王。時彭越在鉅野。衆萬餘人。無所屬。榮與越將軍印、因令反梁地。越擊殺濟北王安。榮遂并三齊之地。

千字文詳解

洞庭は、楊子江の上流岳州に在る所の大湖。

〔荊州記〕に、青草湖、一名洞庭湖。又〔水經〕の注に、

洞庭湖、廣袤五百里。日月若出沒於其中。

然れば雁門、紫塞、雞田等を北方とし、碣石、鉅野などを東方とし、赤城や洞庭を南方とし、昆明を西として、東西南北、幾千里に渉る廣漠の地を、其れ其れ著名の者を擧げて表現したのであらう。故に次に其意を表はして、

曠遠縣邈。巖岫杳冥。

曠遠縣邈にして。巖岫杳冥たり。

斯く北は雁門關や萬里の長城に及び、南は赤城や洞庭の大湖に至り、西は昆明池より東は碣石や鉅野など、廣袤幾千里。誠に曠く遠くして、縣邈と遙かにして見透しもつかぬ大陸である。山には又巖や岫とて山の岩穴など杳かに冥冥として奥深く、廣大の

限りを盡せりとの意。

此の句にして又平韻の一段を終了す。韻字を拾つて見れば、

京、驚、楹、笙、明、英、卿、兵、纓、輕、衡、營、傾、橫、盟、精、并、城。

(八庚)涇、靈、星、經、銘、丁、寧、刑、青、亭、庭、冥。(九青)庚通青。

治本於農。務茲稼穡。

治は農を本とす。茲の稼穡を務めよ。

此の段より入聲の職韻が使用せられてゐる。而して人事を主として述ぶ。

人間生れた以上は、生活を確保せざるを得ない。生活には食物を以て第一と爲す。故に國を治むるの根本は、農事を振起して、食糧を充實せしめねばならぬ。其處で「治は農を本として、茲の稼穡を務めよ」と勸告する。稼は五穀を植えつくる事。穡は其の植え附けた五穀を刈り取る事。五穀とは、米、麥、粟、黍、豆。

俶載南畝。我藝黍稷。

俶めて南畝に載とし、我れ黍稷を藝ゆ。

〔詩經〕 豳風七月篇に、

四之日舉趾。同我婦子。饁彼南畝。田畯至喜。

註に、田畯、勸農官。饁、晝食、辨當。とある。

俶は始めである。之は前の方にて「始制文字」とあるから、其の同字を避けて、此の俶を始めとして使用したのである。極めて例の少ない事である。南畝は南方の日の當りの善い田畝を謂ふ。載は事に同じ。即ち農の仕事をする事。而して我れ彼の大黍小黍を藝え附くる。北部支那は、氣候が寒冷多き爲、古は大概此の黍稷のみを種藝した者である。故に「書經」にも、黍稷非馨。明德維馨などある。現に滿洲の平野にも、大概彼の高梁のみを作れり。此の高梁が大黍で、普通に粟と云ふのが此の稷である。

ある。小黍と訓する。ヒエと解する人あれども宜しからず。ヒエは稗である。

税熟貢新。勸賞黜陟。

熟を税し新を貢し。勸賞し黜陟す。

税とは、上より下に向つて取立つるを謂ひ、貢とは、下より上に向つて奉つるを謂ふ。故に租も税も貢も、皆ミツギと訓する。ミツギは御調。ツギとは供給の義。故に調の敬語。お上の供御に奉ずる義。昔は租を年貢と稱したり。即ち納税の事を年貢を納むと云つてゐたのである。今でも俗に、「最早や年貢の納め時」などと云つて、甘んじて縛に就く者がある。

本文は其の租税として納むるに、熟したる善き穀物を以てし、又本年出来立ての新穀を、貢物として納むるとの事。古は公田上熟の畝には税三升。中熟の畝には税一升。先づ君に貢すと云ふ。其處でお上の役所では、農事を勧め、又は善きをば賞して褒美を與へ、又は怠慢して事務を粗略する者あらば

之を黜け、又は其の反對に勤勉する者をば、陟せて昇給せしむる。斯く農民をば勸賞し、租税を取扱ふ者をば黜陟して、各各の賞罰を明にする。斯くして衣食足れば教育を施す。故に次句に遷つて、

孟軻敦素。史魚秉直。

孟軻は敦素にして。史魚は直を秉る。

孟子、名は軻。魯の公族、孟孫の後裔と云ふ。極めて敦養に長じたる賢者。敦は厚く、素は素直。性質の純潔なるを謂ふ。史魚の史は、歴史官。魚は字。名は鱒と云ふ。衛の大夫である。直を秉るとは、國の歴史を書くに、少しも曲ぐる事なく、善を善とし、惡を惡として、善を勧め、惡を懲した剛直の史官であつた。

劉向の「說苑」に云く、

衛史魚將卒。命其子曰、吾在朝、不能進賢退不肖。是不能

正君也。死無以成禮、置屍于牖下。其子從之。靈公愕然曰、不從魚之諫、寡人之過也。命殯于正寢。乃進遽伯玉、退彌子瑕。孔子聞之曰、古諫者、死則已。未有若史魚、死而屍諫、令其君忠感者也。

此に孟子を擧げて、孔子を擧げざる者は如何。之は外でもない。前句に於いて「藉甚無竟」又「孔懷兄弟」などとある。故に孔の字を使用する事を得ず。之が爲である。甚だ孔だ。然れば孔子の孔の字使用不可能が當然であらう。作者の苦心。察するに餘りあり。

庶幾中庸。勞謙謹敕。

中庸を庶幾して。勞謙謹敕せよ。

何事をするにも、此の中庸を希はざるを得ない。宋の程子曰く、

不_レ偏_レ之_レ謂_レ中。不_レ易_レ之_レ謂_レ庸。中_レ者天下之正道。庸_レ者天下之定
理と。庸とは常。

又「中庸」第二章に云く、

仲尼曰、君子中庸。小人反_ニ中庸_一。中庸者、不_レ偏_レ不_レ倚_レ。無_レ過
不及_レ。而平常之理。乃天命所_レ當_レ然。精微之極致也。唯君子
爲_レ能_レ體_レ之。小人反_レ是と。

庶幾とは、希_レひ望_レむと云ふ意。暑からず寒からず。是れ中である。味の淡からず濃
からず。是れ中である。而も其れが晝より夜に至り、今歳より來歳に至り、常に其の
道を守り通す。是れ庸である。「過ぎたるは及ばざるが如し」とて、出過ぎたのは、出
足らざるに同じ。總てを適當にするとの意。而して勞と骨折つても誇らず。謙してへ
り下り、謹慎戒敕とて、謹しみ戒めて、悪行爲があつてはならぬ。敕にも、謹む、戒
しむ、正すなどの訓がある。易曰、勞謙君子、有_レ終吉。

聆_レ音察_レ理。鑑_レ貌辨_レ色。

音を聆_レいて理を察_レし。貌を鑑_レみて色を辨_レず。

人の音聲とて、言語を聽いて其の中の理に叶ふや否やを察知し、従つて君子か小人か
をも察知すべきである。又次に顔貌を見て、之は怒れる色なるや、將た恕するの色な
りやを辨へ知つて、然るべく應對せざるを得ない。

「論語」爲政篇に、

子夏問_レ孝。子曰_レ色難。有_レ事弟子服_ニ其勞_一。有_レ酒食、先生饌_ニ。
曾是以爲_レ孝乎。〔朱子註〕蓋孝子之有_ニ深愛_一者、必有_ニ和氣_一。有_ニ和氣_一
者、必有_ニ愉色_一。有_ニ愉色_一者、必有_ニ婉容_一。故事_レ親之際、惟色爲_レ難
耳。服_レ勞奉_レ養、未_レ足_レ爲_レ孝也。舊說承_ニ順父母之色_一爲_レ難。亦通。

右論語の意では、子たる者が、親に孝を盡すに於いて、顔色の持ち方が困難との意で

あるが、本文の辨色は、自己に對する人の顔色を辨知するの意である。故に色とあれど、彼此の別がある。又〔論語〕同篇に、

子曰、視其所以、(爲也)。觀其所由、(從也)。察其所安、(人焉廋哉)

哉。人焉廋哉。(廋、匿也。)

文章は異なれども、人を視る點に於いては、之は本文と同一の意味である。

〔孟子〕公孫丑上篇に、

公孫丑問曰、何謂知言。孟子曰、諛辭知其所蔽。淫辭知其

所陷。邪辭知其所離。遁辭知其所窮。〔註〕諛、偏諛也。淫、放蕩

也。邪、邪僻也。遁、逃避也。四者相因。言之病也。蔽、遮隔也。

陷、沈溺也。離、叛去也。窮、困屈也。四者亦相因。則心之失也。

人之有言、皆出於心。

是れ亦本文の「聆音察理」と同一である。聲を音としたのは、前に「空谷傳聲」と

ある。故に同字を避くるが爲である。

貽厥嘉猷。勉其祗植。

厥の嘉猷を貽し。其の祗植を勉めよ。

其の善き謀。即ち國の爲にも人の爲にも、將た吾が身の爲にも、嘉良なる謀を貽して、人間の生れがひを全うせねばならぬ。由つて其の何事を爲すにも祗み、又更に道を行ひ徳を植えて、大に勉め骨折る處がなくてはならぬ。○嘉は良し。厥は其に同じ。猷は謀。貽は遺す。祗は謹む。植は植え立つる。

省躬譏誠。寵增抗極。

躬を省みて譏誠し。寵増さば抗極す。

吾が身を反省し顧みて、若しも過失がありはせぬか。仕事の勉めようが足りないよう

な事はないか。謀の遺し方が足りないようではあるまいかと省みて、譏と、身を責め、戒め謹む。而して又、幸ひ君や上長の爲にお氣に召して、寵愛が増すならば、自ら高振る心が益々極まりなく進む患があるから、用心して高振らずに、前に述べたる如く、「謙讓」して、へり下らねばならぬとの教訓である。○譏は、責む、諫む、伺ひ見るなどの訓。誠は戒に同じ。寵は恵む、慈む、愛すなどの訓がある。抗は、擧ぐ、上がる、高し、過ぐるなどの訓がある。亢に同じ。訓とは讀みと云ふ事。

殆辱近恥。林阜幸即。

辱に殆くば恥に近し。林阜は幸即せり。

恥辱に殆い行ひを爲さば、人よりの辱めを蒙る。昔林阜と云ふ趙の宰相は、餘り家の繁昌する爲嫉みを受けたれば、白雲山に入り、世を逃れて災を免かれた。幸即とは、幸ひに即くとして、無事に行き去り身の災難を免かるるを謂ふ。阜は阜の俗字。又「莊子」に、山

林歟。阜壤歟とあり。又黃庭堅の詩に、杖履之林阜とある。然るときは、山林に逃るゝか、或は澤地や水邊に逃れて身の幸福を全うするかとの意ともなる。其の時は「林阜に幸即せよ」と讀む。阜には、澤地、水岸、水邊の淤地などの訓がある。淤は淤泥とて泥の事。併し前説の方が宜し。又古書では幸を趙王の幸と解しをれど宜しからず。

兩疏見機。解組誰逼。

兩疏は機を見る。組を解かば誰か逼らん。

兩疏とは、疏廣、疏受とて、漢の大官である。疏廣は、仕へて太子太傅に至り、疏廣の兄の子疏受は、仕へて太子少傅に至る。然るに老子の曰へる「功成り名遂げて身退くは、天の道なり」とあるを回顧して、一朝二人とも官を辭して、郷里に歸つたのである。此の事は、韓退之が作られたる「送楊少尹序」の中に、次の如く述べてある。

昔疏廣受二子。以年老一朝辭位而去。于時公卿設供張。祖道都門外。車數百兩。道旁觀者。多歎息泣下。共言其賢。漢史既傳其事。而後世工畫者。又圖其迹。至今照人耳目。赫赫若前日事。

前漢宣帝の太子の太傅と少傅とであつた。傅とは、守役と訓する。即ち補導官である。

其處で機を見ると云つたので、機は幾に通じて、俗に所謂潮時と云ふ者である。即ち最も善き機會と云ふ者である。「易」の繫辭下傳に、

幾者動之微。吉之先見者也。君子見幾而作。不俟終日。と。又「易」に、知幾其神乎ともある。

故に幾微と熟字して、物の現はれ出でんとする兆で、危き意味を有せり。従つて幾微とも危機とも熟字して其の意味を現はせり。

組とは組み紐とて、印を繋ぐ綬、即ち印綬とて、昔官に就けば、其の官に關する所の印を賜はつた者である。今日では斯かる印は官廳に存置して、任官する者は、誰でも其の官廳の印を使用するのである。斯くて仕官した者が、善き潮時を見て退官するならば、誰が逼つて災害などを與ふる者があらうかとの意。即ち功成り名遂げ身退くは天の道なりとは、斯かる意味を述べた者である。此の疏廣、疏受と云ひ、又彼の越の范蠡の如きは、實に善く其の幾を見て作つた者と云ふを得べし。右にて入聲職韻の段を終了して、次に又平聲二蕭の韻に變はるのである。

穡、陟、直、敕、色、植、極、卽、逼。(入聲職韻)

索居閒處。沈默寂寥。

閒處に索居して。沈默寂寥たれ。

閒處は靜なる處。閒を閑に作るは宜しからず。閑は閒の當て字で、正確ではない。閑

は門内に木を建つる字。即ち馬繫ぎ場所の意。故に馬闌、をりなどの訓がある。闌は遮る。即ち闌干、おぼしまなどの訓がある。おぼしまは、てすりの和語。間はひま、あいだ、隙などの訓。故に静かと轉用するのである。間は開の略字とある。併し見易くする爲に、尺度に用ふる時、又は家屋内の疊數などを現はす爲には、其の略字の間を用ひ、静かな意味の時には、閉静と熟字して開の字を慣用せり。元と同字なれども便宜上の區別である。

索は、盡く、淋し、又は求む、などの訓あれども、此處は索居とて、淋しく居ると解するのが宜し。「居を閉處に索む」と讀む説もあれども、一般的に「索居」と云ふと「淋しき住居」と解する方が多數である。又求むるにしても、此の索は搜り索むる意で、單なる求とは異なる。「禮記」に、

「吾離群而索居」すとある。人と交際せずして、寂しく居る意。

沈黙は、沈んで言なき貌。寂寥は物淋し。

功成り名遂げて身退くならば、斯かる閉静な處に索居して、沈黙を守つて、寂寥に晩年を送るのが宜しいとの意。所謂引退か隱居かの意ゆゑ、再び世に出て「でしやばる」者ではないとの事。

求古尋論。散慮逍遙。

古を求めて尋ね論じ。慮を散じて逍遙せよ。

之は隱退して後の行動を述ぶるのである。故に沈黙して寂寥なれども、古書や古物を尋ね求めて、其の是非正邪を論究す。

又獨り鬱すれば、散慮とて氣晴らしに逍遙とぶらぶら散歩する。散慮は文字の如く、吾が幽鬱の慮を散去すること。慮は思ひ計る。

欣奏累遣。感謝歡招。

欣よろこび奏そうすれば累つら遣はなり。感うれひ、謝しゃすれば歡よろこび招まねかる。

奏は湊そう又は輶きうに通ず。湊は船が港に聚あまる字。輶は車の輻そくが心棒に聚合する文字。故に欣よろこび事が聚あまれば、心の煩わづら累らひも遣けん去きよし、同様に心の感うれひ事が謝ことばり去いれば、歡よろこ樂びが自ら招まね來きせらる。

渠荷きよか的てき歷れき。園えん莽ぼう抽ひ條じょう。

渠荷きよかは的てき歷れき。園えん莽ぼうは條じょうを抽ひんづ。

是れより前句の逍遙せうぎやうを承けて、郊外や邸内の草木につき、其の一斑を述ぶるのである。廣き大なる溝に出生せる蓮れんは、的てき歷れきと、綺麗あざやかに鮮あざである。○荷かとは蓮の葉である。蓮と云ふと花の方を意味し、荷と云ふと、多くは荷葉と熟字する。渠荷は蓮の異名。的てき歷れきは鮮明なる貌。宋の歐陽修の文に、

芙蕖ふこ菱りやう荷か之の的てき歷れき。幽蘭ゆうらん白芷はくし之の芬ふん芳ほうとある。

芙蕖ふこは蓮花。菱りやう荷かは、菱と蓮葉。白芷はくしは藥草、香高し。園えん莽ぼうは、庭園の草木。其の草木は枝を伸ばしてゐる。莽ぼうは草の深き貌。併ひし花卉くわいを意味する。條じょうは長き枝。枝しは幹かんに對する枝の總稱語。

枇ひ杷ぱ晚ばん翠すい。梧こ桐とう早はや凋しほ。

枇ひ杷ぱは晚ばんに翠すいり。梧こ桐とうは早はやく凋しほむ。

黄金の如き果實を著くる枇杷は、歳としの晚ばんれの冬ふゆに爲つても、尙ほ其の葉凋しほまずして綠色を保ち、梧こ桐とうの青桐や桐の白桐は、秋あきに成れば早く凋しほみて落葉する。「淮南子なんなんじ」に、「一葉落おちて天下知し秋あき」とある。箏そう箏そうや火鉢ひばちなどに造るのは、此の白桐の方である。青桐せいとうは多く觀賞植物として愛用せらる。

陳ちん根こん委い翳い。落らく葉えつ飄ひょう飄ひょう。

陳根は委翳し。落葉は飄飄す。

又草木の古き根は、廢れ枯れ、落つる葉は、風の爲に飄り吹き散さる。○陳は古い。委はゆだね、まかす。又棄つ、などの訓がある。翳は匿る、退くなどの訓がある。故に併せて木の自然に枯死するを謂ふ。飄は飛揚とて、風の吹き上ぐる貌。

游鷗獨運。凌^ニ摩^一絳^ニ霄^一。

遊鷗獨り運り。絳霄を凌摩す。

鷗は大なる雞、即ちシヤモとあれども、シヤモが天空を凌摩するはづはない。之は何かの間違ひと思ふ。「莊子」逍遙遊篇に、

北冥有魚。其名爲鯤。鯤之大、不知其幾千里也。化而爲鳥。其名爲鵬。搏扶搖而上、則九萬里。其翼若垂天之雲。とある。之れも寓言とて、大言壯語の喩へ話である。兎に角鯤には、大鯨、又大魚などの譯が

ある。「列子」にも亦、

有魚焉。其廣數千里。其長稱焉。其名爲鯤。

とある。兎角彼の國の人は、事實なき虚事を、針小棒大に辨じたがる惡癖を有せり。唐の李白の、「秋浦の歌」にも、次の如く吟詠せり。

白髮三千丈。緣愁似個長。不知明鏡裏。何處得秋霜。と。

鷗は或は鯤の誤り。鯤が遊び飛べは、鵬と爲るから。故に之を大鳥と解して、其の大鳥が、天下吾れ獨りの矜恃を以て、天上を飛び運り、以て赤味を帯びたる天空を、摩れ摩れに高く凌ぎ飛び廻はるとの事。之は功成り名遂げて身隱退する以上は、此の大鳥の如く、誰れ憚るべき懸念なく、天地間狭しと獨歩し得るとの、自主自由の状態を形容した者であらう。○絳は赤色。霄は天空。凌は他の物を推し退ぐる意。摩は摩擦。鵬は大鳥。以上にて二蕭の韻の一段が、亦終了した處である。

遙。遙。招。條。凋。颯。霄。皆平聲蕭韻。次は又仄韻であるべきなれども、平聲陽

韻である。併し其の次が又仄韻であるから、差支なし。

耽讀 翫市。寓目 囊箱。

耽讀して市に翫び。目を囊箱に寓す。

これから又一般的に移つて、「學問」の事を述ぶる。書を読むに耽りて、自宅内の書を読み盡し、依つて市に出でて書林の家に到り、購入せずして手當り次第に讀む。之は後漢の王充と云ふ者の故事を應用したのである。略述すれば、

〔後漢書〕王充字は仲任。會稽の人なり。班彪に師事す。家貧にして書なし。常に洛陽（東都）の市肆に遊び、賣る所の書を閱し、一見輒ち誦憶す。遂に衆流百家の言に通じ、郡に仕へて功曹と爲る。後に論衡三十卷八十五篇を著はし、時俗の嫌疑を正す。永元中卒すとある。

次に目を寓するとは、囊裏の書物や、箱の中の書籍などに目を片寄せるので、讀書に

ついて非常に熱心なるを形容した者である。箱は書物箱で、周知の事なれども、囊は袋である。然れども包むと云ふ解があるから、帙に入つた書物と解しても宜し。併し又錦囊と云ふ事もある。〔唐書〕李賀の傳に、
每旦日出、騎弱馬、從小奚童、奴背古錦囊、遇所得書、投囊中。及暮歸、足成之。

又〔漢武內傳〕にも、
王母巾笈中、有一卷書。盛以紫錦之囊。曰此五嶽眞形圖也。此の外にも猶ほ、「盛以錦囊、嘗置之座側。」（五代史）等の語がある。然れば帙と解せずとも宜し。

易輜 攸畏。屬耳 垣牆。

易輜は畏る攸。耳を垣牆に屬けよ。

易も輜も俱に輕しと訓する。便ち輕輕しく苟なる事でも、君子は之を畏れて慎み、亂りに言語を出してはならぬ。常に「壁にも耳あり」との俚言を心得て、縦ひ己れ獨りの處にても、人を誹るなどの事があつてはならぬ。故に吾耳を、垣や壁にも屬けて、氣を附けよとの事。○攸は所。屬は附くる。垣は玉垣とか、石垣などと熟字す。牆はカキと訓すれども、籬と異なる。牆壁と熟字して、能く田舎にある所の土塀の事である。練塀とも云ふ。晉の陶淵明の詩に、

採菊東籬下、悠然見南山。とある。此の籬をマガキと訓する。牆は「孟

子」に、盡心上篇。

孟子曰、莫非命也。順受其正。是故知命者、不立乎巖牆之

下。〔註〕巖牆、牆之將覆者。

○垣は低き方。牆は高き方。

具膳餐飯。適口充腸。

膳を具へ飯を餐ひ。口に適ひ腸に充つ。

膳とは、肉と善との合字ゆゑ、客などに供する御馳走の意、即ち善き食ひ物である。其れが一轉して食を具ふる事に爲り、再轉して食器を載する臺の名と爲る。故に此に言ふ具膳は、食物を能く準備し整へて御飯を食ひ、而も餘り飽食せずして、適度に之を口にし、又腸内に充つると、之も實は胃腑内に充つるのであるけれども、韻字の關係からして、腸と云ふ七陽の韻字を使用したのである。昔から「腹八分に病なし」と云ひ、又俗に「命は食に在り」などと云ふ。實際經驗上から得た格言である。人間飽食の爲に、斃れてはならぬ。○餐は晚餐と熟字して、飲食に共通する。轉じて食ふと爲る。熟食である。

飽 飫 烹 宰 饑 厭 糟 糠

飽きては烹宰をも飫ひ。饑ては糟糠に厭る。

烹とは煮る事。我國では料理屋の事を割烹店と云ふ。割は割く故、生の者は多く之れに屬する。烹は煮る故、吸物や煮肴など。宰は司る。所謂司廚が其れである。乃ち料理をする事。故に宰夫を以て酒食を掌る職と解する。飫は飽き足る意。前句を承けて、「口に適ひ腸に充ちた」ならば、其の上には如何なる珍膳美味も口には入らぬ。故に餘り飽食する者ではない。成るべく空腹にすべきであるとの意。俗に「美食飽人の口に入らず」と云ふ事がある。切角の御馳走も無駄に爲る。故に平素よりして餘り飽かぬように注意せよとの意。

饑は飢に同じ。又古語に、「飢ゑたる者には食を爲す易し」とある。甚だしく空腹を感じたる時には、酒の糟でも、米の糠でも、食物として足る事が出来るとの意。故に平素よりして成るべく働いて、飢を訴ふようにせよ。然れば病を起す事は、絶対に無い。

「珍膳美味を善しとせぬ」と解したる書もあれども、珍膳美味が必ずしも悪いと云ふ意ではない。人間は普通の動物などとは違ひ、相當なる營養食を攝取せねばならぬ。然るに平素から飽くまで多食してゐると、胃腸を害して、折角の烹宰をも厭ひ、之を賞味する事を得ず。之に反して能く筋肉を勞して空腹にあれば、縱令糟糠の如き粗末な物でも饜き足つて却つて、胃腸を健全にするゆゑ、榮養食攝取と大差なき事を得との意味にも解する事が出来る。中以下の農業者や勞働者が、健康體の持主たる事は、皆此の「饑厭糟糠」の方の爲である。○厭はイトフと訓す。故に飽くの意あり。從つて饜に通ず。饜は、厭と食との合字ゆゑ、食に飽くとも、満ち足る、とも訓する。併し一般には、厭は。厭世などと熟字して、厭ひ嫌ふ方の字である。嫌ふ所から轉じて、飽き足ると訓するのである。○具と云ふと、例へば味の五種を描へる如き意。即

ち甘い、辛^カい、苦^クい、酢^スばい、鹹^ハゆい。やはり食物中には、斯の如き者をも適度に攝取する必要がある。七味唐辛の如き物を用ふるのも、之れが爲である。御料理の中に荔子^ニを用ふる如きも、具味の爲である。又厭^イを足ると讀むのも、下の方に「矯^ニ手頓^ニ足^ニ」とある。故に同字を避けて、此の足るの代用品として、厭^イの字を用ひたのである。

道草の序に今一つ、筆者の古詩中に、左の句がある。

甘脆^{カン}常^{ゼイ}滿^ハ勞^ツ者^ノ舌^ニ一^ニ惰^ダ遊^ノ之^ハ土^ハ天^ヲ奪^レ餐^ヲ
請^{コト}看^{コト}春^ノ園^ノ花^ニ似^レ錦^ニ。此^ノ花^ハ曾^テ經^ル三^ノ冬^ノ寒^ヲ。

故に人は勉めて苦勞し、空腹を感じ、筋骨を鍛錬し、以て各自の目的に向つて、勇敢に突進せざるを得ない。

親戚故舊。老少異糧。

親戚故舊。老少糧を異にす。

料理より、食の材料や分量に移り、親は父に關する親類。戚は外戚と謂つて、母方に關する親類を謂ふ。故舊は古き因縁ある知り合ひ。此の各人に通じて、老者と少者と、食物に分糧の差や、又は質の差があると説くのである。一例を擧ぐると、少壯の者は、少々粗食するも差支なけれども、老人は、自然運動も少なく、體力も弱つてゐるから、餘りの粗食では維持出來ない。「孟子」の中には、次の如き事が出てゐる。

五畝^ホ之^ノ宅^ヲ。樹^レ之^ニ以^テ桑^ヲ。五十^ノ者[、]可^レ以^テ衣^{キル}帛^ヲ矣[。] 鷄^{ケイ}豚^ト狗^コ彘^シ之^ノ畜^ヲ、
無^レ失^シ其^ノ時^ヲ。七十^ノ者[、]可^レ以^テ食^フ肉^ヲ矣[。] 百畝^ノ之^ノ田[、]勿^レ奪^ル其^ノ時^ヲ。八口^ノ
之^ノ家[、]可^レ以^テ無^レ飢^ス矣[。] 謹^ニ庠^ノ序^ノ之^ノ教[、]申^レ之^ニ以^テ孝^ヲ悌^ヲ之^ノ義[、]頌^ル白^ノ者[、]
不^レ負^シ戴^シ於^テ道^ノ路^ニ矣[。] 老者[、]衣^ト帛^ヲ食^レ肉^ヲ、黎^レ民[、]不^レ飢^ス不^レ寒^ス。然^レ而^モ不^レ王^ス
者[、]未^ダ之^レ有^リ也[。] 梁^ノ惠^王上[。]

彘とは豕として、豚の大なる者。八口は八人。庠序は學校。申は重ぬ。頌白は頭髮の白

黒半雜り位の人。不負戴とは、少壯の者が老者に代つて、荷物を脊中に負ふたり、頭上に戴いたりして、老者を助け痛はる意。黎民は帽子を用ひない頭髪の黒き人民。併し之は牧蓄業の盛なる彼の國の事である。我日本とは、事情を異にするから、一概に論ずる事は出来ない。依つて只だ一例を挙げたるのみ。

○糧はカテとて、食ひ物の義。糧食とも食糧とも謂ふ。併し米と分量の量との合字ゆゑ、食ひ物から一變して、穀類の分量とも云ふ事が出来る。故に老者と少者との區別は、食物の材料にも多少の差を要し、又分量にも多少の差を要すと解せば宜し。要するに老者は、勉めて少食主義を守らねばならぬ。

妾御績紡。侍巾帷房。

妾御は績紡し。巾に帷房に侍る。

今度は婦人の事を述ぶる。妾は接とて、身分が卑賤であるから、纔に主人に接近する

を得との文字。我國では之を目懸と訓する。之に對して妻は、齊で、主人と齊等の意義。故に妻は、主人と對當の家より迎ふのが本義である。御は侍る意であるから、妾と殆ど同意義。御車とか御馬などと熟字する字ゆゑ、主人が自由に使用する婦人と云ふ。凡そ斯かる婦人どもは、紡績とて、麻絲をうみ、絹絲を採る意。今日では、紡績會社があつて、種々の絲を製造する。昔は婦人が、綿を棒狀にして、之を手車に掛け絲に引き伸ばし、或は養蠶して繭より絹絲を製出する。而して之を染めて織機に掛けて、一家の衣服は、殆ど婦人どもの手にて出来た者である。筆者ども少年の頃、尙ほ左様であつた。麻絲をうむ事は専門的で、一般的家庭では出来ない。

巾は頭巾とも布巾とも熟字して、佛家では「巾瓶」との熟字がある。今はやはり其の巾瓶の方が宜し。弟子が老師に仕事するを、「巾瓶に侍る」と云ふ。巾は、茶碗や茶道具などを拭ふ所の布切れ。瓶は水瓶とか鐵瓶とか熟字して、師の爲に水仕事をすることである。此處の「巾に帷房に侍る」は、其の意味が宜し。帷は戸張り、房は室。即ち

一家の婦人どもは、是の如き水仕事を以て主人に仕へ、起臥又は飲食などの事を致すべしとの意。昔鮑宣、家貧。常に少君に就いて書を讀む。少君賢徳あるを見、女を以て宣に嫁せしむ。宣妻に語つて曰く、君の家富貴。今此の貧賤に來たる、何ぞ敢て之れに當らんと。妻曰く、願くは妾を以て君子に配し、當に巾櫛に侍して、以て婦道を盡すべしと。又一説に、「巾は頭巾なり。男子二十にして士は冠し、庶人は巾す。巾櫛の禮は、女が夫に仕るを謂ふ」と解すれども、餘り適當ではない。巾はやはり布巾の方で、頭巾ではない。此の巾櫛と云ふのも、巾は布巾で、食器を始末する意味の文字櫛は頭髮を梳る櫛。

紈扇圓潔。銀燭煒煌。

紈扇は圓にして潔く。銀燭は煒煌たり。

今度は室内用具の、晝の物と、夜の物とを掲ぐ。紈扇とは、支那一流の絹張團扇。圓

くして皎潔。如何にも綺麗。多くは文字か繪畫かが書いてある。之は主として夏の晝用具。又夜は銀製の燭臺に蠟燭を炷して、煒煌と照り輝いてをる。

晝眠夕寐。籃筍象牀。

晝は眠り夕に寝ぬ。籃筍に象牀。

之はやはり前の「索居閑處」より繼續と見ば、別に不思議な事はない。故に晝とて別段の用事も無いから、晝食後に居眠りと云ふ所。又夜とて別に急ぐ用もないから、夕方より早く寝る。而して寝る所の敷物は、籃色を爲した若竹の簟。又象牙などの飾ある臥床などの上にも寝ると云へば、大體夏期の生活状態。且つ之は毎度述ぶる如く、彼國の室内は、土間の方が多ゆゑ、敷物や臥床を要するので、靴を常用する者の、「何處も同じ秋の夕暮」と云ふ所。

絃歌酒讌。接杯舉觴。

絃歌酒讌。杯に接し觴を舉ぐ。

絃は絲筋として、琴や琵琶などを意味し、歌は聲樂。而して酒盛りをする。讌は元と人が會合して語り合ふ字なれども、此處では燕又は宴に通じて、酒盛りする事に爲る。國語にうたげすと云ふ。うたげは、拍子を取り掌を拍ち上げの約。故に酒宴を意味する。燕も宴も俱に安らかに楽しむ意あり。酒盛りは、酒を杯に盛る意。故に互に杯を舉げて相ひ勸め酬ゆるを謂ふ。又觴とて角製の杯を手に舉げ持つ。韻字の關係により杯を用ひずして此の角杯を使用したのである。若し水牛の角杯ならば、三合も五合も入れられよう。能く水牛の角にて製せし花挿しがある。斯くして自らも飲み、客にも飲まする。

矯手頓足。悅豫且康。

手を矯げ足を頓かし。悅豫して且つ康し。

矯は擧ぐ。頓は頓頓と足拍子などする事。故に動かすと訓す。頓は元と頓首などと熟字して、ぬかづくくと訓す。止むる意の文字である。今は反對の意味。斯くして悅豫と喜び樂しみ、且つ身心共に康寧。

嫡後嗣續。祭祀蒸嘗。

嫡後嗣續し。祭祀蒸嘗す。「嘗又作嘗」

嫡の長子が、父の後を承け嗣いで父子相續し、而して祖先の祭や、天地山川の諸神を祀る。春を祓と云ひ、夏を禘と云ひ、秋を嘗と稱し、冬を烝と稱する。秋と冬とを擧げて、他を包含す。我國では春の彼岸祭を「春季皇靈祭」と稱し、秋の彼岸祭を「秋

季皇靈祭」と稱する。而して農村では、主として「夏祭り」と「冬祭り」とを盛に行ふ。○蒸は蒸す。又蒸暑などと熟字して、蒸し暑き字なれども、烝に通じて用ふ。故にやはり冬祭りとの訓がある。蒸には又新嘗の訓もある。新穀を供して宗廟を祭るを。新嘗祭と云ふ。我國では春の皇靈祭が三月二十一日。秋の皇靈祭が九月二十四日而して新嘗祭は十一月二十三日と爲つてゐる。○祭は、神事などを爲して賑に祭る事。祀は、社を設けて神を迎へ、或は邸内や神棚などに祀り上ぐる事。祭は又享と解す。享には、うく、奉る、すすむ、もてなすなどの訓がある。「禮記」王制篇に、天子諸侯宗廟之祭、春日禘、夏日禘、秋日嘗、冬日烝とある。秋は嘗、新穀、冬は進、品物との事。故に嘗を嘗に作り、烝に進むの訓がある。禘亦作禘。薄祭也。併し唐土の新穀は黍稷とて、高粱や粟の類。故に秋に「嘗新穀」と云ふ。我國のは米穀である。故に冬の新嘗祭に、此の米の新穀を供するのである。故に冬の烝には一面「新嘗」の訓あり。一面又進むの訓があつて前述の如く「品物

を進む」と説くのである。各々理窟がある。古書には、春は禘。其の生を求む。夏は祀。其の長を祈る。秋は嘗。其の熟を賀す。冬は蒸。其の恩を報ずとある。

稽顙再拜。悚懼恐惶。

稽顙再拜し。悚懼恐惶す。

類は類。稽は止むる。四季烝祭等の爲に、類を地に著けて再び拜し、懼れ惶れ謹しんで尊敬す。神黨や儒教は再拜。佛教では三拜。之が一般的である。○悚懼恐惶の四字皆恐れ入り謹しみ敬ふ貌。

牋牒簡要。顧答審詳。

牋牒は簡要に。顧答は審詳に。

又書簡を認むるには、簡にして要を得たるを貴ぶ。簡とは、粗目と訓する。事少なく

要事だけを書き綴る。併し之れに反して人に向つての回答に於いては、成るべく判然と詳密に認むべし。○牋牒も共に札。顧は回顧。答は答書。審詳は共に詳か。判然の意。

骸垢 想_レ浴。執_レ熱 願_レ涼。

骸垢かいかうつかば浴よくを想おもひ。熱あつを執とれば涼りやうを願ねがふ。

平素又衛生にも注意して、身體に垢附かば、湯浴を想起して風呂などに入るべし。夏ならば水浴。他は温浴。何れにても宜し。健全の精神は、健全の身體に宿ると云へば皎潔なる精神は、亦自ら皎潔なる垢なき身體に宿る事を忘るべからず。又熱く熱した者を手に執らば、火傷を起すゆゑ、涼を願うて速に冷すべし。火傷を受けたならば其の手を冷水に投入すべし。

驢 騾 犢 特。駭 躍 超 驤。

驢ろ騾ろ犢とく特とく。駭はい躍やく超てう驤じやうす。

驢は驢馬とて、耳の長く丈の低き兔馬。騾も騾馬とて、支那馬の丈低き馬。普通の牝馬と牡驢との間の子と云ふ。犢は牛の子。即ち小牛。特は牡牛を謂ふ。又一頭の牛を特と曰ふ。「禮記」の内則篇に、庶人特豚。士特豕。とある。之は特を一匹と解する方。或る説に、特を「豚の子」と解しあれど字典に其の解なし。駭は驚く。躍は踊り上る。超は飛び越ゆる。驤は飛び上る。廣き屋敷内や、或は牧場などにて、乗用の驢馬や騾馬、食用の小牛大牛などが、飛び廻り、跳廻りなどしてゐる有様を述べた者であらう。

誅_ニ斬 賊 盜。捕_ニ獲 叛 亡。

賊盜を誅斬し。叛亡を捕獲す。

又盜賊や馬賊などを捕へ獲ば、誅斬とて、罪に落として斬首する。又叛亡とて、君に叛き謀叛を企つる者をば、召し捕へて罪に行ふ。惡を懲し善を勸むる所以である。○誅は殺す、ツミナフ、責む、などの訓がある。「周禮」に、犯禁者。執而誅罰之とある。斬は斷ち切る。斬首、斬殺。賊は傷ふ。盜は窃盜、強盜。叛は負く。亡は惡事を爲して逃亡する者。

以上にて平聲陽韻の一段が終了せり。従つて次には、去聲嘯韻の句と爲る。

箱。牆。腸。糠。糧。房。煌。牀。觴。康。嘗。惶。詳。涼。驤。亡。(皆平聲七陽の韻字)

布射遼丸。嵇琴阮嘯。

布射遼丸。嵇琴阮嘯。

三國時代の呂布と云ふ者は、射術を善くし、善く馬に騎つて左右に之を射る。百歩を隔て、柳葉を射るに、百發百中箭虛發せずとある。又宜遼と云ふ人は、能く九鈴を弄す。八箇は常に空中に在り。一箇手に在り。楚、宋と戦ふ。楚王大に敗る。宜遼胸を抜いて、刃を軍前に受く。鈴を弄する時は、一軍並に戦を停めて之を看る。楚王遂に難を免るることを得たりと云ふ。然れば丸は鈴である。

〔莊子〕卷五則陽篇に、

孔子之楚、舍於蟻丘之漿。其鄰有夫妻臣妾登極者。漿、賈也。登、登屋也。子路曰、是糶糶何爲者邪。糶、糶也。仲尼曰、是聖僕也。是自埋於民、自藏於畔。其聲銷、其志無窮。其口雖言、其心未嘗言。方且與世違而心不屑。與之俱。是陸沈者也。人謂大隱也。是其市南宜僚邪。而兩家之難解。子路請往召之。孔子曰、已矣。云云。冠註云、夫子一見、知爲宜僚。宜僚亦一見、知爲

夫子。

〔莊子〕卷五、徐無鬼篇に、

仲尼之楚。楚王觴之。孫叔敖執爵而立。市南宜遼受酒而祭。曰、古之人乎。於此言己。曰丘也聞不言之言矣。未之嘗言。於此乎言之。市南宜僚弄丸而兩家之難解、孫叔敖甘寢乘羽而郢人投兵云云。二人皆以無爲而解難。

尙ほ莊子卷四山水篇にも宜僚の事出づ。併し他書には見えない。

嵇琴とは、晉の竹林七賢人の中に、嵇康と云ふ者がゐた。彈琴に妙を得たりと云ふ。奈良正倉院内に秘藏せる阮咸と云ふ琵琶に似たる螺鈿塗りの樂器は、やはり此の竹林七賢中の一人阮咸と云ふ者が造つたとか申し傳ふ。

阮嘯は、阮籍とて、是れ亦七賢の一人。嘯き歌ふに妙を得たりと云ふ。つまり吟詩の名人と云ふ所。嘯はうそぶくとて、口を細くして長く聲を出だすを謂ふ。七賢とは

〔君臣故事〕に、晉、稽康所與交者、惟陳留之阮籍、河内之山濤、河東之向秀、沛國之劉伶、阮籍之兄之子阮咸、瑯琊之王戎。遂爲竹林之遊。世所謂竹林之七賢也。とある。

俗世を忘るるにも此處まで至れば、盡せりと謂ふべし。

恬筆倫紙。鈞巧任鈞。

恬が筆、倫が紙。鈞は巧に、任は鈞。

斯く別けて讀んでも宜し。然れば前の二句も、布の射遼の丸。嵇の琴阮の嘯と讀んでも、これと同様である。恬は蒙恬とて、秦の始皇帝時代の將軍である。蒙恬六十萬の軍を率ゐて、北邊即ち萬里の長城を守つて匈奴に備ふ。此の人が始めて兔毛を以て毛筆を造つたと云ふ。又後漢の蔡倫と云ふ人が、始めて紙を造つたと云ふ。然れば紙の出來ざる以前はと云ふと、帛に書いたと云ふ。又其れ以前は竹簡とて、竹を割つて火

に炙り、油を抜いて簡と爲し、其れに漆を木頭に附けて科斗文を書いたと云ふ。即ち文字の始まりで、之を古文と稱す。漆で書くゆゑ、頭大尾小と爲る。恰も蝌蚪に似たり。故に然か名づくとなん。

〔事類全書〕に、

或問曰、蒙恬造筆。然則古無筆歟。曰非也古非無筆。

但用兔毛始於恬。

〔後漢書〕蔡倫傳に、

自古書契多編以竹簡。其用練白者、謂之紙。練貴而簡重。

竝不便于人。倫乃造意、用樹膚、麻頭、及弊布、魚網以造紙。

元興元年上之。和帝善其能。自是天下無不用。咸稱蔡侯紙。

鈞巧とは、昔し馬鈞と云ふ人が、指南車を造つたと云ふ。巧は工匠の巧みなるを云ふ。指南車については、數千年の昔、黃帝が蚩尤と戦つた時、蚩尤能く大霧を作す。

故に黃帝指南車を造つて、方角を誤まらなかつたと傳ふ。恰も我朝左甚五郎が、機械人形を造つたと云ふ如き者であらう。

任鈞は、任公と云ふ釣魚に巧な人が、東海に於いて大魚を釣つたと云ふ。之は莊子の中に、「莊子」卷五雜篇外物篇に、

任公子爲大鈞、巨緇、巨綸也。五十犗以爲餌、犗、犗也。蹲乎會稽、投竿東海。旦旦而釣。期年不得魚。已而大魚食之。牽巨鈞、陷

沒而下。鰲揚而奮鬣。白波若山、海水震蕩。聲侔鬼神、憚赫千里。任公子得若魚、離而腊之。自澗河以東、蒼梧已北、

莫不厭若魚者。已而後世、輕才諷說之徒、皆驚而相告也。

輕才、小才也。諷說、譏說也。云云。

所謂莊子の寓言ゆゑ、一種の小説と見るべし。併し斯かる小説をも材料にするのが彼の國人の殆ど習慣である。小説も亦一の文學であるからである。

李遷の註に云く、馬鈞、武帝時、造指南車、至今傳之。刻木爲人、衣以五綵、能自舞。與人無異。能開門戶、春簸。造車一乘、左轂上著磨、右轂上著碓。行十里、磨麥成麪、春穀成米。不勞人力。其工巧如此。任公善釣於東海中、釣得一魚長十里、引得海水之泛驚、得神人走出、蒼梧之地三年厭魚肉、人飡美之、珍也。古人の註と云ふ者は、是の如き者である。

釋紛利俗。竝皆佳妙。

紛を釋き俗を利す。竝に皆佳妙。

以上述ぶる所の布、遼、嵇、阮、恬、倫、鈞、任等の諸名士。皆能く其の智囊を控つて、紛紛たる事件を釋き明かし、以て世の中に便利を興へて俗を利益した。竝に皆其の佳良なる妙を得て、世は益々以て文明に進んだとの意。

毛施淑姿。工翠妍笑。

毛施は淑姿。工みに顰し妍しく笑ふ。

今度は二人の絶世美人を挙げ來たる。「管子」に云ふ、「毛嬙西施、天下之美人也」と。毛嬙は吳國の美女。西施は越國の美女。淑姿は、しとやかに麗はしき姿。工は巧である。或る時西施が、胸が痛むゆゑ、手にて之を抑へ、顔を蹙めて市内を通過せしに餘り美人に見えたゆゑ、田舎の鄙女だが、吾れも斯く顔を蹙めると美人に見えるのかと誤解して、顔を顰して市内を徘徊したと云ふ。其れこそ滑稽千萬。泣き面に蜂以上の醜顔であつたらう。之を「顰に習ふ」と云つて、笑ひ草の一にしてゐる。

〔莊子〕卷三天運篇に、

西施病心而顰、同其里、其里之醜人、見而美之、歸亦捧心而顰、其里之富人見之、堅閉門而不出。貧人見之、挈妻

子而去之走。彼知美。曠而不知曠之所。以美。惜乎。とある。

曠とは顔を盛める事。妍笑は美しく笑ふ意。「論語」八佾篇に、

巧笑倩兮。美目盼兮。素以爲絢兮。

とある。其の巧笑倩たりが、此の妍笑である。朱子の註に、「倩好口輔也。盼目黒自分也」と。好口輔とは、笑へば頬にえくぼの生ずるを謂ふ。「素は白とて、胡粉地。

畫之質也。絢采色。畫之飾也」とある。つまり巧笑倩たり美目盼たる美質の上、更

に粉、黛、口紅等の采色を加ふるを謂ふ。又「詩經」衛風碩人篇に、

手如柔荑。膚如凝脂。螭首蛾眉。巧笑倩兮。美目盼兮とある。

ついでを以て略解せば、

茅の始めて生ずるを荑といふ。柔にして白い。凝脂は、脂の凝結せる者。亦白い。螭

は蟬の一種。衣蟬とも言ふ。頭の形、方にして文あり。「毛傳」には、頰廣くして方と

ある。蛾は蠶の孵化して蝶と爲つたる者。眉細長にして婉曲。倩は笑窪。盼は眼球の

黑白分明なる貌。螭首の首は頸に非ずして頭の事。

皆以て美人の形容で、妍笑の意味を詳細に敷衍したる者である。

西施は、越王勾踐が隣國の呉と戦つて敗北した時、退却して會稽山に潜入して、呉に

和を乞ふ。其の時の賄賂に、莫大な黄金と、此の國內第一の美人西施とを、呉王夫差

に献上して和睦が許された。昔より「美人多くは薄命」と云ふ。西施こそ一種の人身

御供。斯くて間もなく呉王夫差は、越の爲に滅ぼされたのである。併し史上有名の美

人であつた故、「孟子」の中にも出で、曹洞宗の開祖道元禪師の著書中にも引用せられ

てゐる。

〔孟子〕卷三離婁下篇に、孟子曰、西子蒙不潔、則人皆掩鼻而過之と。

註に、「西子美婦人。掩鼻、惡其臭也。」と。(西施の事である)

〔學道用心集〕第一章、(永平初祖著)

縦聞ニ緊那迦陵、讚歎之音聲、夕風拂耳也。
縦見ニ毛嬙西施、美妙之容顏、朝露遮眼也。

と。但し冠註者曰、「疑毛嬙者、王嬙之誤歟。王嬙字昭君。尤美色。後賜單于。」此の

王昭君は、漢の元帝宮裏三千の美人中第一人者と云ふ。

又「莊子」には、毛嬙麗姬。人之所美也。疏云毛越王之嬖妾也と。

又「吳越春秋」に、諸暨有苧羅山。若耶溪傍有東施家、西施家。

西施、姓施而西。越王用范蠡計、獻之吳王。

〔漢書〕匈奴傳に、元帝以後宮良家子王嬙字昭君、賜單于、王昭君、名嬙。齊國

王穰之女。

併し「管子」に「毛嬙、西施は天下の美人なりと」あれば、其の通りにて可なるべし。

年矢毎催。曦暉朗曜。

年矢毎に催し。曦暉朗かに曜く。

年は矢の射る如く、去ること速か。日と云はず月と云はず。時時刻刻、毎に時間を催して光陰を送り、人を催ふして老い易からしむ。併し其の中曦暉と云ふ月日の光りは、朗かに曜きて、絶えず此の世界を光被してゐる。曦は日光。暉は光る。併し螢火を暉夜と曰ふから、耀きも柔か。故に暉を以て月の光と見るも差支なし。曜は赫く。やはり日光とある。之れも流光の行き易きを謂ふのである。

璇璣懸幹。晦魄環照。

璇璣懸幹し。晦魄環ら照す。

〔書經〕舜典篇に、

正月上日。受終于文祖。在璇璣玉衡。以齊七政。

文之器。可運轉者。七政、日月五星。各異政。舜察天文、齊七政、以審已當天心與否。

千字文詳解

在察也。璇璣玉衡、王者正天

本文の璇璣は、尙書中の璿璣玉衡と同一の者である。古代の「天文觀測器」である。併し之は斯く述ぶるだけで、實際上今日使用してゐる者ではない。懸はかかる。斡は旋る。故に周旋する事を、斡旋すとも言ふ。今は此の天文器についての語である。後漢の蔡邕云、玉衡長八尺。孔徑一寸。下端望、以視星辰。蓋懸璣以象天。而衡望之。轉璣窺衡、以知星宿。璣爲轉運、衡爲橫簫。運璣使動於下、以衡望之。」

研究するに及はず。知らずして可なり。

次に晦は三十日。月籠と云ふ。舊曆の三十日は、月が何處かに籠つて見えない。魄は月の始めて生ずるを謂ふ。斯くて三十日には月が見えなくなり、又三日目頃から例の新月が現はれ、而して月の半ばに至つて満月と爲る。斯く環り環つて、晝は太陽が照らし、夜は月が照らすと云ふのである。

指薪修祜。永綏吉劭。

薪を指して祜を修めば、永く綏らかにて吉劭なり。

〔莊子〕卷一内篇養生主に、

指薪窮於爲薪火傳也、不知其盡也。〔註〕薪、喻形、火、喻神。薪所以傳火。爲薪者既窮、火亦隨盡。喻形有死而神無死、本不當哭也。

又〔王註云〕以薪繼薪則火不能滅。知生養生則生不滅。則火所以傳不絕。則生所以久。所以無時而盡也。

莊子の文は、極めて難解であるが、畢竟する所は、火は薪を焼くに因つて生じ、薪盡くれば火は滅すれども、薪さへ無限に繼續せば、火は絶えて消えざる如く、善き祜事を修むれば、吉劭の芽出度い事は、決して盡きないとの意。○祜は福に同じ。幸ひ

と訓す。綏は安。勗は元と勉むとの字なれども、高し、美しなどの訓もある。故に吉と綴つて、吉祥に代用する。押韻の爲である。

矩步引領。俯仰廊廟。

矩步引領して。廊廟に俯仰す。

矩は規矩の矩で、曲尺である。正確なる物の換へ語である。故に歩行するにも、規則正しく歩るく事。引領は眞面目に爲つて首を引き伸ばし物を仰ぎ見る貌。態度の嚴正なる意。故に平素私宅に居住する時も、朝廷の廊下や宗廟の座に在つて、或は俯して見、或は仰いで見る時の如く、眞實を籠めて行動すべしとの意。引領については、

〔孟子〕卷一、梁惠王上篇に、

今夫天下之人牧。未有不嗜殺_レ人者_一也。如有不嗜殺_レ人者_一、則天下之民、皆引領_レ而望_レ之矣〔領、頸也。〕

首を引き伸ばして仰ぎ見る意。實意が籠つてゐる貌。

廊は殿下の外屋。即ち母屋に接せる廊下の細殿とある。即ち廊下の事。併し廊廟と熟字すると、表御殿とか、正殿との訓がある。〔史記〕に「賢人深謀於廊廟」とある。廟は祖先を祭る所。靈屋と譯する。廟を有せざる朝廷はなきゆゑ、廊廟の二字を以て「政治堂」とも解するのである。又朝廷の殿堂にて廊下續きのない所はない。故に斯く合せ言ふのである。

束帶矜莊。徘徊瞻眺。

束帶矜莊に。徘徊瞻眺す。

獨り一般人民のみならず。直接仕官せし人も、矩歩引領して、廊廟に俯仰せざるを得ない。従つて朝服即ち禮服を著用し、矜莊として、尊嚴の態度を保ち、徘徊と廟堂内を往きつ戻りつ、瞻眺と仰ぎ見、眺め見て、自己の本分を全うす。束帶とは、裝束を躬

に著け大帯を帶用する事。

〔論語〕卷二、公冶長篇に、

子曰、赤也東帶立於朝、可使與賓客言也。

徘徊は、往きつ戻りつ。立ち廻はる貌。瞻は仰ぎ見る。眺は眺臨と熟字して、下に向ひ臨み見る貌。

孤陋寡聞。愚蒙等諄。

孤陋寡聞。愚蒙諄りを等しくす。

以上陳ぶる所、極めて見聞の知識寡なく、自分一人の陋しき意見を述べたるに過ぎない。全く愚かにして、頭上に物を蒙つたが如くで、見る所が狭い。等しく誹謗を受くるであらうとの意。極めて謙遜して、上文の結語を爲すのである。

謂語助者。焉哉乎也。

語助と謂ふは。焉哉乎也。

其處で上文を收束せしゆゑ、文章の末尾に使用する所の助字を列擧して「千字文」最後の結語と爲したのである。者也は、俱に上聲馬韻。

文章を綴るに、語の助と爲るべき置字と云ふ者がある。其の置字に依つて、文字の用に輕重などの意を含ましむる。併し其れは單に此に擧げた「焉哉乎也」の四字位ではない。尙ほ多數あるのである。然れども四言の詩句故一一具述する事が出来ないから、只だ此の四字を擧げて、他は包含せしむる意味の者である。焉は、これを、この、ここになどと讀む場合に使用する。

〔論語〕卷三、先進篇、子路曰、有民人焉。有社稷焉。

〔書經〕秦誓篇、其心休休焉。其如不容焉。

〔中庸〕第一章、中也者、天下之大本也。和也者、天下之達道也。致中和、天地位焉、萬物育焉。

同第十四章、君子無入而不自得焉。

同第二十六章、鼃鼃、蛟龍、魚鼈生焉。貨財殖焉。(以上皆「ここに」の解である)。

卷二、雍也篇、閔子騫曰、善爲我辭焉。

此の焉は「之を」の解。

哉はかなと訓して、感動詞と、反語とに使用してゐる。

〔論語〕卷一、爲政篇、人焉廋哉。人焉廋哉。

同、大車無輓、小車無輓、其何以行之哉。

右は反語の例。

〔論語〕八佾篇。子曰、管仲之器小哉。

同卷二、公冶長篇、子謂子賤、君子哉若人。

右は感動の意の例。

乎は、反語と疑問と又は呼び掛くる場合などに使用する。

〔大學〕第二章、子曰、於止知其所止、可以人而不如鳥乎。

〔論語〕卷一、爲政篇、至於犬馬皆能有養、不敬、何以別乎。

同卷二、子罕篇、吾誰欺、欺天乎。

右は反語の例。

〔大學〕第四章、子曰、聽訟吾猶人也。必也使無訟乎。

同第六章、曾子曰、十目所視、十手所指、其嚴乎。

〔論語〕卷三、先進篇、子曰、論篤是與、君子者乎。色莊者乎。

〔中庸〕第十六章、子曰、鬼神爲德、其盛矣乎。

右は疑問詞として使用せり。

〔論語〕卷一、里仁篇、子曰、參乎。吾道一以貫之。

右は呼び掛くる時の例。也は断定である。故に終止にも用ひる。又反語にも用ひる場合あり。併し反語の方は少ない。

〔論語〕卷二、泰伯篇、曾子曰、可以託六尺之孤、可以寄百里之命、臨大節而不可奪也。君子人與。君子人也。

同、邦有道貧且賤焉恥也。邦無道富且貴焉恥也。

〔中庸〕第十九章、事死如事生、事亡如事存、孝之至也。右の如き也は、断定とも終止とも稱すべき者である。断定が終止なる事は言ふまでもない。

又同第二章、君子中庸也、君子而時中。小人之反中庸也、小人而無忌憚也。

右の中「君子中庸也」と、「反中庸也」との也は、係詞で、國語の第二係詞の「ぞ、なん、や、か」のやに同じ。而して「無忌憚也」の也は断定である。次に反語と爲る例を少し拾つて見れば、

〔論語〕八佾篇、素以爲絢、何謂也。

同 王孫賈問曰、與其媚於奧、寧媚於竈、何謂也。

又同公冶長篇、子曰、臧文仲、居蔡、山節藻梲、何如其知也。○何如同如何。

斯く問ひ掛くる場合と、又上に「如何ぞ」と係る場合の「結び」などに、也を用ふる事が多い。此の外矣、而已、諸、兮など澤山あれども、本編では、其の中二三を挙げたるのみで、他は皆省略せり。殊に矣の如きは、使用上極めて多き語助である。又兮は音稽。詠嘆的の助詞で、殆ど讀まない。

〔孟子〕離婁上篇、有孺子歌曰、滄浪之水清兮、可以濯我纓。滄浪

之水濁兮、可以濯我足。孔子曰、小子聽之。清斯濯纓、濁斯濯足矣。自取之也。

矣は意味を強く断定する場合に使用す。

〔論語〕卷一、學而篇、有子曰、其爲人也、孝弟而好犯上者鮮矣。

右の「其爲人也」の也は係り詞。

同、曾子曰、慎終追遠、民德歸厚矣。

爲政篇、子曰、溫故而知新、可以爲師矣。

八佾篇、子曰、起予者商也。始可與言詩已矣。

里仁篇、曾子曰、夫子之道、忠恕而已矣。

斯の如く「而已矣」と綴る場合は、特に重き場合に限る。

耳は已に同じ。物を制限する場合。而已は更に之を強く制限する場合。即ち輕重の差あり。

爲政篇、敏於事而慎於言、就有道而正焉。可謂好學也已。(此の焉は焉れをと讀む意。)

同、子曰、攻乎異端、斯害也已。(斯れ害なるのみの意。)

右の「也已」の也は、國語のなりで、説明の意を有して、而して下に已の制限詞を加へたのである。故に也は(である)、已は(ばかり)と解する。耳に同じ。

卷二、雍也篇、子曰、回也、其心三月不違仁。其餘則日月至焉而已矣。

同、泰伯篇、周之德、其可謂至德也已矣。

卷三、顔淵篇、子張問明。子曰、浸潤之譖、膚受之愬、不行焉、可謂明也已矣。浸潤之譖、膚受之愬、不行焉、可謂遠也已矣。

此の「不行焉」の焉は、ここにの意。「可謂也已矣」の也は、謂ふべくある許りである。也は説明動詞に使用して、下に已の制限詞を加へ、更に矣を以て詞を強めたので

ある。

諸、輕き意味の反語である。

〔論語〕卷二、雍也篇、子曰、犂牛之子、騂且角、雖欲勿用、山川其舍諸。

卷三、顔淵篇、景公曰、善哉。信如君不君、臣不臣、父不父、子不子、雖有粟、吾得而食諸。

此の「善哉」の哉は感動詞。

卷三、子路篇、子曰、舉爾所知。爾所不知、人其舍諸。

併し今日では、反語に諸を用ふる者なし。反語の時には、哉、耶、乎などを使用する。要するに哉には、反語と感動詞とがあり、耶と乎には、反語と疑問詞とがある。即ちやは反語、カは疑問。邪は耶に同じ。併し疑問詞には、今日多くは歟の字を使用せり。語助は、右の外尙ほ澤山あれども、此の邊にて省略すべし。

其處で亦韻を拾つて見れば。

嘯、釣、妙、笑、曜、照、劭、廟、眺、誚、〔以上皆去聲嘯韻〕

最後の、

者、也、〔上聲馬韻〕

以上にて略ぼ終了。頗る難解な者である。雜然たる故事多きが爲である。

千字文詳解 (畢)

自 跋

本編を詳解しつつ進行する中に、不圖氣附いた事が一つある。其れは原作が左の如く爲つてゐるけれども、歴史上多少前後する處があるから、予は試に之を變更して見んと欲し、次の如く兩文を竝記したのである。識者の判断を仰ぐ。

○原 作

碯溪伊尹。佐時阿衡。
奄宅曲阜。微旦執營。
桓公匡合。濟弱扶傾。
綺廻漢惠。說感武丁。
俊入密勿。多士是寧。

○私 案

碯溪伊尹。佐時阿衡。
奄宅曲阜。微旦執營。
綺廻漢惠。說感武丁。
俊入密勿。多士是寧。
桓公匡合。濟弱扶傾。

晉楚更霸。趙魏困橫。
假途滅虢。踐土會盟。
何遵約法。韓弊煩刑。
起翦頗牧。用軍最精。
宣威沙漠。馳譽丹青。

假途滅虢。踐土會盟。
晉楚更霸。趙魏困橫。
何遵約法。韓弊煩刑。
起翦頗牧。用軍最精。
宣威沙漠。馳譽丹青。

従つて左に時代の順序を述べて見よう。(韻は八庚と九青(通韻))

○殷。伊尹(阿衡)。武丁(高宗)。傅說(大臣)。

○周。碯溪(太公望)。且(周公)。

○春秋。齊桓公(始爲霸)。滅虢(晉獻公)。踐土(晉文公)。晉、楚(更霸)

○戰國。趙、魏、頗(廉頗||趙)牧(李牧||趙)

○秦。起(白起||秦)翦(王翦||秦)韓(韓非||秦)

○漢。綺(綺里季||漢)何(蕭何||漢)